麒麟児になりて

氷月

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時代の影に生きてきた一族の青年が恋姫の世界に転生する。

時代背景やなんやらメチャクチャになるやもしれませんが、ご勘弁ください。

アンチや原作キャラ死亡があるやも、そういったものが苦手なかたはご遠慮ください。

読んでいて不快に思われた方、気持ちを抑えお帰りください。

読んでいて、あれ？面白いんじゃね？と思った方はお気に入り登録し、読んでやってください。

目次

プロローグ 1
1話 3
2話 7
3話 10
4話 12
5話 15
6話 19
7話 22
8話 27
9話 33
10話 37
11話 41
12話 46
13話 51
14話 55
15話 59
16話 63
17話 68
18話 71
19話 74
20話 79
21話 84
22話 88
23話 93

28話 120
27話 115
26話 110
25話 103
24話 98

プロローグ

主人公ｓｉｄｅ

おかしい絶対になんだ？

昨日は夕食を食べて夜の鍛練をしたあと、何時も通りねたはず、なのに…

「なんだここはぁぁ～!?」

目が痛い！周囲の色が瞬時に変わる。身体は動かないし、ヤバイ気持ち悪く…

「やあ」

そんな俺の前に現れ声をかけてきた青年。

「お前は！渚カｗ」

「初めまして如月狼君」

「え、あ、ああ初めまして」

名前を言おうとしたら言葉かぶせられた、それは名前は言うなと言うと言うことか？

「さて君をここに呼んだのは僕が呼んだんだ。」

「ふーんそれで俺になにをしろと？」

そんな渚（仮）の言葉にあまり興味なさげにかえす。

「君にとっても悪い話じゃないと思うよ？」

「それで？」

「生まれ変わってみないかい？」

??なにをいってるんだ？

「どういう意味だ？」

「少し言葉が足りなかったね、狼君三国時代に生まれ変わってみないかい？」

三国世界に？

「それはどういうことだ？ましてや三国時代なんて大昔の話だぞ？それとも二次元に転生とか言うのか？」

「その通りだよ」

まじか、こんなことあり得るのか？

「君の力は今の時代には必要なものじゃない」
「な?!」
渚（仮）の言葉に驚いた。こいつは俺の力を知っている。
俺の一族は代々暗殺者の家系だ。
そのなかで俺は歴代一の実力といわれている。

「それに君が守るべき人はもう」
「……そこまで知っているのか、ああ確かにそうさ。」
俺の守るべき人は俺のお袋、お袋は体が弱かった、病院で最善の治療を受けていたが半年前に死んだ。
お袋は愛人だった、故にお袋の看病や病院の支払いは俺がしていた。。
「君に行って欲しい世界は三国時代をもとになっている世界で外史と呼ばれる世界の一つだよ。」
「外史……にてはいるが別の世界って所か」
お袋はもういない、俺の力は度が過ぎている…か。
「その話受けた。」
「なにか願いごとはあるかい?」
俺の答えに渚（仮）はそんなことを言ってきた。
「俺の愛刀刹那とお袋からもらった名前狼、これは持っていきたい」
「わかったよ、僕が頼みたいのは君にその世界を平定して欲しいんだ」
「なるほど、手段は選ばなくていいのか?」
「君に任せるよ、誰かに支えるもよし、自分で立ち上がるもよし、それじゃあ…」
ん?なんだか引っ張られてる気が?ふと後ろをみるとブラックホール?!
「嫌?!ちょ、まっ!」
そう言いながら俺はブラックホールに吸い込まれていった。
「……頑張ってね狼君、今度こそ幸せに、ね」
そんな渚（仮）の言葉は俺には届かなかった。

1話

狼ｓｉｄｅ

三国時代の世界に転生してから１０年がたった。

まあ色々なことがあった。

まずこの世界の俺は姓は姜、名が維、字が伯約、真名を狼（ラン）。

あの姜維伯約になったわけだ。天水の麒麟児とよばれ魏から蜀にわたり戦った人物。

ああ、真名というのは本人の許可無く呼べば、殺されても文句を言えないほど大切な名のことである。

んで親父はいない５年前戦死した。

それからはお袋が１人で育ててくれた。

今では俺も山で猪やらを狩ったりしている。

二人目のお袋は体が弱くなかった。

名は姜華静奈（セイナ）、真名は水仙。背はさほど高くないがスラッとした体型、厳しくも優しい自慢のお袋だ。

今俺は木の上で寝転がっている。

なぜかと言えば……

「コラー！狼！アンタ、またこんなところでさぼってんじゃないわよ！」

……見つかっちまったか。

「詠、別に俺のことは気にしなくていいって言ってるだろ」

「そんなわけにはいかないでしょ！」

俺をどなる緑色の髪で眼鏡をかけた少女、名を賈ク文和、真名を詠という。

詠が賈クだと聞いたときは驚いたな、なぜに女の子!?と。

詠の母親、賈李雀羅（サクラ）、真名は楓、身長はお袋よりは低いけどまあ、むねがお袋よりあるかな？

楓さんはお袋の友人で親友らしい。

「全く、そんなに抜け出さなくったっていいでしょ？」

まったくといった風の詠にいう。

「俺が居ない方が他のやつもやりやすいだろ？」
そう俺は私塾を抜け出して木の上で寝ていた。
「天水の麒麟児と呼ばれるアンタがそんなんでどうするのよ」
「それは勝手に周りが呼んでるだけだろ？」
俺が天水の麒麟児とよばれる理由はその武と智、そして深紅の瞳のせいだ。
そのせいでさんざん馬鹿にされた、気にしてはいないが面倒だった。
それに渚（仮）との約束もある、なんにせよ動き始めなくてはいけない。
俺と詠、姜維と賈クが幼なじみの筈がないこの世界は史実とは似て非なる世界。
武も前世の半分くらいにはなった、これならそうそう遅れはとらない。
今から旅に出て世の中を、人物を見る必要がある。
そう思いながら木の上から降りる。
「さっさと戻るわよ！」
「いや、今日は帰る」
「アンタね～！」
俺の答えに肩を震わせ怒っている詠、だけど私塾に行く気はない。
「そんなに怒るなよ詠、そうだ今日は俺の家に飯食いにこいよ、そうと決まれば猪でも狩に行くか、じゃそう言うわけで」
そう言って走り出す。後ろから詠が叫んでいるが気にせずに。
狼ｓｉｄｅｏｕｔ
詠ｓｉｄｅ
ボクの名前は賈ク文和、真名は詠。
今、お母さんの親友の水仙さんの一人息子で幼なじみの狼を探している。
アイツまた私塾を抜け出して、探すボクの身にもなりなさいよ！
狼は武も智もあり、幼少の頃から天水の麒麟児とよばれていた。
そして麒麟児と呼ばれるもう一つの理由はその深紅の瞳。

本人はなにを言われても知らん顔だが、ただ一つ母親の水仙さんの悪口を言われると怒る。
暫くして木の上で寝転がっている狼を見つけた。
またこんなところで、そう思いながら木上で寝転がっている狼にこえをかけた。
「コラー！狼！アンタまたこんなところでさぼってんじゃないわよ！」
ボクの声に反応して狼は身体をおこした。
「詠、別に俺のことは気にしなくていいっていってるだろ？」
「そんなわけにはいかないでしょ！」
そんなわけにわいかない、何のために来たと思ってるのよ。
「全く、そんなに抜け出さなくったっていいでしょ？」
「俺が居ない方が他のやつもやりやすいだろ？」
っ！確かに狼の事をからかい始めると五月蝿いのは確か。でもボクは狼が居ないと退屈だ。
張り合う相手が居ない。
「天水の麒麟児とよばれるアンタがそんなんでどうするのよ」
「それは勝手に周りが呼んでるだけだろ？」
はぁ、とりあえず連れて帰ろう。
それがいいわ。
そう考えていると狼が降りてきた。
「さっさと戻るわよ！」
「いや、今日は帰る」
「アンタね～！」
こいつはなにいってるのかしら？
肩を震わせ怒っているボクを見て狼が話しかけてきた。
「そんなに怒るなよ詠。そうだ今日は俺の家に飯食いに来いよ。そうと決まれば猪でも狩に行くかな。じゃそう言うわけで」
そう言って走り出す狼、って！
「コラーまちなさ～い！」
そう叫ぶボクの声は走っていく狼には届かなかった。

詠sideout

2話

狼ｓｉｄｅ

「ご馳走さまでした。」

俺はそう言って箸を置いた。

「詠ちゃんも、もうよかった？」

「はい、ご馳走さまでした」

「お粗末さまでした。」

今は俺と詠とお袋の三人で俺が獲ってきた猪と茸を使った鍋を食べたところだ。

「そう言えば狼、あなたまた私塾抜け出したらしいわね」

飯を食べ終えてから急にお袋がニコニコしながら話しかけてきた。

詠をみるとニヤリと笑っている。くそ、喋りやがったな！

「げ、詠！お袋に話したな！」

「げ、じゃありません！全くあなたときたらこれで何度目ですか！」

お袋は普段は優しいが怒ると説教が長いのが難点だ。

「狼！聞いてるの?!」

「聞いてるよ、お袋。」

「あなたにも考えるところがあるんだとは想うけれど。」

「……俺、私塾をやめて旅にでる」

「なっ!?」

「・・・」

俺が旅に出たいと口にすると詠は驚きの声をあげ、お袋は黙った。

「アンタなに考えてんのよ!?」

「詠、このあと世は何処に向かうと思う？」

「アンタなに言って・」

「１０年以内に間違いなく戦乱の世がやってくる。」

俺の話をお袋と詠は黙って聞いている。

「言いたくないけど、朝廷はながくない。私利私欲にはしり、民を疎かにするやつが増えてるのは間違いない。そんなことにあと何年民達が耐えられる？考えるまでもなくすぐに限界はくる。そうなれば朝

廷は崩れ、我こそはと諸侯が名乗りをあげて戦乱の世になる。だからこそ今から旅に出て自分の支える主がいるのか、自分が立ち上がるのかを見極めたいんだ！支えるにしても立ち上がるにしても仲間も探したいし。」
「そう、そこまで考えているならなにも言わないわ」
「水仙さん!?」
　俺の言葉に仕方がないといった感じで許可をだしたお袋。その言葉に詠は驚いている。
　正直俺も驚いている。
「あなたが天水の麒麟児と呼ばれるようになってから、薄々はおもっていたのよ。この子は大きな人になるってね。」
「お袋」
　お袋はニッコリと笑いながらそう言ってくれた。
「・・狼、勝負よ」
　さっきまで黙っていた詠が碁盤を指差しながら口を開いた。
「・・・何を賭けてだ?」
　いつも俺と詠が碁を打つ時は何かを賭ける。
「ボクが勝ったらボクと一緒に仕官する」
　詠の仕官先、月か。
　月とは詠の幼なじみで董卓のことだ、初めて見た時は嘘だと思ったよ。
　酒池肉林じゃ～はどこいったんだよ！どこの聖少女かと思たわ！といった感じだった。
「俺が勝てば旅にでる、と」
「そうよ！」
　なんでそんな勝負をかけてきたのか。まあ、詠は月が大好きだからな。
「受けた、始めようぜ」
「負けないわよ！」
　そう言って俺は碁盤を挟み詠と対峙した。
「・・・・・」

「9目半差、惜しかったな詠」
結果は俺の勝利だった。
勝負を決めたのは中盤に打った一手、その一手が勝負を決めたのだ。
何気なく打ったように見えたであろう一手。その一手は全てを読みきったうえでの一手だった。
詠は俯き震えている。
「負けたんだから文句はいわない。何処にでも行っちゃいなさいよ！」
そう言って家を飛び出して行く詠。
「・・・・」
「追いかけなくていいの？」
飛び出して行く詠を無言で見ていた俺にお袋がそう言ったが・・・
「無理だよ、」
そこで言葉を区切り立ち上がり詠の座っていた椅子をみて
「敗者に・・・・・慰めはいらないよ。」
その椅子に出来た新しい水の跡を見ながらそう言葉を続けた。。
狼ｓｉｄｅｏｕｔ

3話

詠ｓｉｄｅ

狼に碁で勝負を持ち方かけて賭けをした。

そして、ボクは負けた。

狼を引き止められなかった。

悔しかった、何より悲しかった。

悲しい？何を考えているのよ。

月に支える人材を確保出来なかったことが悲しい？

そんな言葉はおかしい。

じゃあ何が・・・

自問自答していてようやく気がついた。

悲しいのは狼と会えなくなるから、側から居なくなってしまうから。

今までそこにあったものがなくなってしまうから。

気がついた、気づいてしまった。

認めてしまえ。認めて何が変わるわけじゃない。

「負けたんだから文句はいわない、何処にでも行っちゃいなさいよ！」

そう言って狼の家を飛び出した。

情けないわね、負けて悔しくて飛び出したんじゃなくて、悲しくて泣いたのを見られたくなかったからなんて。

きっとあの口ぶりだと、明日にでも旅にでるつもりだ。

ボクはどうしたらいいんだろう。

見送りに行ったところで結果はかわらない。

見送りに行って泣くくらいなら、いっそ行かない方がいいかもしれない。

そんなことを考えて歩いてるうちに私塾の宿舎についた。

考えがまとまらない。

どうしたらいいのかわからない。

そんな状態で布団にはいる。
布団にはいると急に涙がでてきた。
「なん、で、きゅうに、こんな」
涙は一向に止まらない。暫く泣いていると今度は眠くなってきた。
ボクは眠気に勝てず目を閉じて眠りに落ちていった。

朝、早くに目が覚めた、まだ外はうっすらと明るい程度。
「随分早く起きちゃったみたいね。」
身体を起こし隣をみると見知らぬ箱が置いてあった。
「なによこれ?」
その箱を開けると見知った物が入っていた。
「これって狼の・・」
狼の小刀だった。狼の主な武器は細身の片刃の剣、それとは別に持っていたのがこの小刀だった。
確か銘は・・・
「・・月詠」
その月詠の入っていた箱の蓋の内側に文字が書いてあった。
[詠、なんだか泣かしちまったみたいだな。だけど何も今生の別れって訳じゃないんだから泣かないでくれよ。また帰ってくるからよ。その証しに月詠を預けてく、大切に扱ってくれよな大事なもんだから。その月詠が詠と月を護ってくれるはずだ、だからまた会う日まで元気でな。]
「・・バカ、挨拶くらいしていきなさいよ」
そう言いながらもボクの気は晴れていた。
狼は自分の目標に向かって歩きだした。ボクも負けてられないわね
「ボクは月を支える!誰にも負けない軍師になる!」
そう強く心に決めた、強く誓った。
狼に伝わるように月詠を強く強く胸に抱いて。

4話

狼が旅を初めてから2週間がたっていた。
最初に目指しているのは長安、誰に会うためと言うわけでなく一番近く大きいからだ。
自分と詠のことを考えると、三国時代の出生の頃合いが滅茶苦茶な可能性がある。
そのことから、自分の曖昧な三国志の知識をもとに三国になった段階の領地を想像し、武将や軍師を探すことにしたのだ。
「気で強化しながら走ってきたし、もう見えてもいいと思うんだけどな」
旅をはじめてから狼は2週間野宿をしながら徒歩で長安をめざしていた。
ピューイ
そうつぶやきながら歩く狼の肩に1羽の燕がとまる。
「長安まであとどれくらいだ颯（はやて）？」
その燕を颯と呼び指で頭を撫でながら話しかける。
もちろん颯は喋れない、だかピュイピュイと何度かなく。
「そうかあと半刻くらいか。」
しかし狼には颯が何をしゃべっているのかが理解できた。
颯は一年程前、家の前で怪我をしているところを保護し治療をしてやったところ、何故か意志疎通出来るようになり、なつかれたのだ。
颯は針尾雨燕という種類の燕で呼ぶところによっては、その容姿から悪魔の鳥と呼ばれる種類だ。
「そうとわかれば行きますか」
そういって気で強化し走り出した。

「お～なかなか賑わってるな～」

長安に着きなかにはいった狼は大通りを歩きながら呟いた。
「しかし見られてるな」
そう、狼は今深紅の瞳を隠すために布を巻いている。
そのせいでチラチラとみられる視線を感じていた。
しかし、狼は深紅の瞳が嫌いな訳じゃない。
ならなぜ隠しているのか、それは鍛練である。
風を感じ、気配を感じ、神経を研ぎ澄ますために。

今までは水仙の目があったため控えてきた前世での修行を、この旅を期に始めた訳である。
態々野宿をしているのも修行に他ならない。
医療の発達していないこの時代において毒は驚異である。
使われた毒の特定をしている間に死んでしまう可能性が高いだろう。
ならば抗体を作ればいい。
毒素を薄め摂取する、年単位でゆっくりと耐性をつけるいうものだ。
「まずは情報収集からはじめｍ「食い逃げだー!!」・・」
情報収集をはじめようとした矢先に、食い逃げだーという声が聞こえ声のした方向を見ると1人の男が此方に走ってきている。やれやれと思いながらも男の進路に狼は立った。
「退けガキ～!!」
食い逃げ犯である男は進路に立ちふさがる狼に向かって叫びながら拳を振るった。
しかし狼は男の拳を半歩下がってかわし、男の顎を膝で蹴りあげた。
顎を蹴られた男は、ガッ!と短く声をあげ後方に1回転して倒れた。
狼は蹴る瞬間に違和感を感じていた。
『蹴る瞬間、何かが男足を引っ張った。勢い良く膝に向かってきた反発力そのせいで1回転したんだ。』

狼にはその何かの見当は付いていた、うっすらと男の足に伸びた細い線。
『たぶん鋼糸だな、そして』
その線をたどった先にいたのは自分と同じ位の人影。
狼がそんな考えをしている間にその人影は歩きだした。食い逃げされた店の店主が追い付いてきた。
店主が食い逃げ犯である男を捕まえている間に、狼はその人影を追いかけ始めた。

「さっきは助かったよ。ありがとう。」
狼は追い付いた人影にそう話しかけた。
「何を言っているの？」
その声は幼さが残るも凛とした女の声だった。
「さっき男の足を引っ張ってくれただろ？・・・その鋼糸で」
狼は少女の袖のなかにある、気を帯びた鋼糸の存在を指摘した。
「！・・・気づいていたの？」
少女は一瞬驚いたようだがすぐに冷静にかえした。
「まあね、俺は姓が姜、名は維、字が伯約、良かったたら名前をおしえてもらえないかな？」
「貴方が天水の・・・私は司馬懿、司馬懿仲達よ」
まさかいきなりこんな大物に出会うとはと、内心狼は驚いたのだった。

5話

思いもよらない形で司馬懿と出会いをはたした狼は、いくらか驚いたもののすぐに冷静になる。
「俺も知ってるよ司馬八達、その中で最も優れた者」
「よくその名をご存じですね」
「まあ、有名だから、ね。しかし何で長安に？」
「父親の知り合いが私塾を開いているので」
狼の質問にそうかえす司馬懿。
狼はその答えが史実通りなのかは知識になかった。
「立ち話もなんですし、私の家に来ませんか？まあ借り屋ですが。」
思考をしている狼に司馬懿からそんな提案があげられた。
断る理由もないため狼は頷き司馬懿に着いていく。
暫くして一軒の屋敷の前で司馬懿が立ち止まった。
借り屋と言っていたが十分な大きさの屋敷であった。
司馬懿に案内され屋敷に入ると侍女であろう二人の女性が出迎えた。
「「お帰りなさいませ」」
「ええ、お客様を連れてきたから部屋にお茶をお願い」
「畏まりました」
「お荷物をお持ちいたします」
司馬懿に指示され一人はお茶を入れに、一人は荷物を司馬懿から受け取り歩きだした。

「それでは失礼します」
そういってお茶を持ってきた侍女が退室していった。
「さて、わざわざ家まで連れてきて何を話すんだ？」
「貴方は今後の世がどうなるとおもっていますか？」
わざわざ自分の家に連れてきたからには何かあるだろうとふんだ狼の質問に、司馬懿はそう問いかけてきた。

「今後の世、ね・・・だから家に連れてきたわけか、大方想像してるんじゃないのか？」
「ええ、確かに。ですが貴方の口から聞きたいんです。」
「・・・今後の世は戦乱になる、あと十年もしないうちにさ。その中で俺はどうするかそれを見極めるために今旅をしているところだよ」
「そうですか、ところでその目を隠しているのは嫌いだからですか？」
「いや違う、この目はお袋がくれた大切な目だ。嫌いになんてならない。」
「なら外して見せてください」
　目の事を知った上で見せてほしいと言われたのは初めてだった。
狼は物好きだなと思いながらも布をほどいた。
「・・・・・」
「怖じ気づいたか？」
　その目をみた司馬懿は黙ってしまった。怖れたと思い問いかけた、しかし狼の想像とは異なる返答が待っていた。
「・・・綺麗な目。」
「綺麗？」
「目の色なんて関係ない。目を見ればその人の心の有りようがわかると、私はそう思っています。」
　この目を見て綺麗と言われたのは初めてだった。
　気味が悪いなどの罵倒をされたことは幾度もあった。
　だから狼は嬉しかった大好きな母親からもらった目を誉められたことが。
「そう言われたのは初めてだよ、ありがとう司馬懿」
「／／／／」
　狼がニッコリと笑いながらお礼を言うと司馬懿は顔を赤くして俯いた。
　司馬懿は幼いながらも綺麗な顔立ちで将来は美人になるだろう。
　そんな彼女が顔を赤くして俯いている様子はとても可愛らしいと狼は感じていた。
「顔が赤いが大丈夫か？」

「え、ええ、大丈夫よ。それよりも一局お願いできませんか？」
少し動揺したように見えた司馬懿だが、すぐに切り替え碁盤をゆびさし、対局をねがいでた。
「あまり期待しないでくれよ？」
「それは出来ない相談ですね。」
そんな軽口を叩きながら二人は対局を始めた。

対局の最中司馬懿は食い逃げを捕まえた狼の動きを思い出していた。
『素人の攻撃とはいえ、目隠しをしたまま紙一重でかわしあまつさえ私の鋼糸を見抜いた武、噂にたがいません、更に知略においても並みではないですね。』
今現在中盤でやや司馬懿の優勢、しかしこのままでは終わらないと司馬懿は感じていた。

対局の結果は司馬懿の半目負け、しかし司馬懿は久しぶりにら本当に久しぶりに楽しかった思った。
私塾には相手になる者がおらず、退屈していた。姜維伯約噂にたがわぬ実力。
司馬懿はそれが嬉しくてたまらなかった。
「お嬢様」
司馬懿がそんなことを考えていた時、侍女の司馬懿を呼ぶ声が扉の外からした。
「入っていいですよ」
「失礼いたします。お食事の準備ができましたがどうなさいますか？」
そう言われ外を見ると外は暗くなっていた。
対局に集中して時間がたったことに二人は気がつかなかった。
「そうですね。姜維さん、もしよければ今日はうちにお泊まりになりませんか？」

「いや、それは迷惑じゃないか？」
「そんなことありません。それに私が招いてお付き合いしてもらったのですし。」
狼は司馬懿の申し出を断ろうとしたが、駄目だった。
「それじゃあ、お言葉に甘えさせてもらうか」
「はい♪」
狼がそう言うと司馬懿は嬉しそうに笑った。

6話

狼の朝は早い、素振りに正拳突き、そして気を練る事を日課としているからだ。
普段は無心で行う狼たが今日は、無心ではいられなかった。なぜなら・
『朝起きて第一声が知らない天井だ、ってなんでだ俺?!』
朝起きたら変な電波を受信した狼は、逃げたがりな中学生パイロットの台詞を口走ったらしい。
『あれは俺じゃない！あれは俺じゃない！』
「随分早くに起きられるんですね」
心の中で自分に強く言い聞かせながら刹那を振るう狼。
そんな狼に司馬懿が近づき声をかけた。
「まあ日課だからな」
「それにしても凄い剣速ですね、微かにしか刀身が見えないなんて」
狼の剣速は並の兵では見切ることは不可能な剣速、狼が地道に築き上げた努力の結晶である。
「司馬懿は鋼糸を使うんだよな？」
昨日みた限り中々の技量があるのは間違いない、そうなれば是非見てみたいと狼は思った。
「とても誇れるようなものではありませんが」
そう言いながら右手を振るう司馬懿、その袖から伸びた鋼糸は木の枝に巻き付き司馬懿が腕を引くと音もなく切断された。その光景をみて狼はあることを思い司馬懿にたずねた。
「その鋼糸、誰かから貰ったものか？」
狼が気になったのは鋼糸に付加している気と司馬懿の気が同一でないこと、似てはいるが異なる気、恐らくは血縁の者だと思った。
「ええ、祖母が使っていたものを頂きました。」
なるほどと、納得したように頷いた狼、その様子に首を傾げる司馬懿。
「ああ、司馬懿の気と司馬懿の鋼糸におびている気が違うからもしか

したらってな。もし扱いきれていないならそれは」
「私の実力不足ですか。」
そう言って少し悲しげな表情を浮かべる司馬懿に、狼は言葉を続ける
「まあかもしれないが、それだけお祖母さんが凄い使い手だったってことだな」
司馬懿は祖母の事を思い浮かべた、鋼糸を自在に操り岩をも砕く素晴らしい武を持った祖母だった
「だけど司馬懿にだって才能はある、だからそんなに思い込まなくていいんじゃないか？」
司馬懿は自信があった、しかし武は伸び悩み才能がない、と。
智には自信があった、しかし武は伸び悩み才能がない、と。
「そんな司馬懿に少しだけ助言だ、鋼糸は気で操作するんじゃなくて、鋼糸に気を流し後はじぶんで頭の中で思い描くんだ、腕を動かせば初動がばれるから。」
そういって懐から鋼糸を取り出し右手に握る。
そして次の瞬間司馬懿の切り落とした枝が空を飛び粉々に切り刻まれた。
「・・・凄い。」
司馬懿はその様子に驚きを隠せなかった。
狼は動きを見せていなかった。この歳で祖母に匹敵する狼の鋼糸の扱いに尊敬を覚えていた。
憧れたその実力に。
「鋼糸の扱いは一朝一夕にできるものじゃない。ただひたすらに想像するんだ自分のからだの一部を動かすように」
それ故に司馬懿は師事を仰ぎたかった、が狼は旅の身、それに自分にも士官の誘しが来ている。
「さて、じゃあ俺はこれで失礼するよ」
「そんな、せめて朝食くらいは」
「今のうちにしなくちゃいけないことがあるんだ悪い」
引き留めようとする司馬懿たが、無理に引き留めることはでかな

かった。
「仕方ありませんか、姜維さん貴方の智そして武に敬意を評して私の真名を預けたい、私の真名は愛理といいます。」
「俺の真名は狼だ。」
そういって握手を交わす二人。
「また会えますか？」
「また会えるさ。」
手を離し体の向きをかえる。
「それじゃあ愛理また会う時まで元気で」
「はい、狼さんもお元気で」
そういって別れの言葉を交わし狼は歩きだした。
この時司馬懿は愛理は決意をした。
鋼糸を扱いきれるようになったら、もっと智を身に付けたら、私は貴方に仕えます。
「その為にも、努力しなくてはいけない。」
後の最強の義勇軍の軍師がいま進みだした。

7話

長安を出た狼は長沙を目指して山の中を歩いていた。
それは後に江東の虎と呼ばれることになる孫堅と小覇王孫策を見るためだ。
しかし狼の知識では孫堅が長沙の太守になるのは黄巾の乱以降はずだった、これもこの世界の歪な部分と割りきる。そして出来ることなら呉にいた武将、軍師の1人2人位仲間に欲しいと考えていた。
「程普と黄蓋は無理だとして、甘寧、周泰、呂蒙、陸遜、太史慈、陵統、諸葛謹あたりか。」
思い付いた限り武将や軍師の名前をあげる狼、自分が呉に入るならそれでよし、入らなくても呉の戦力を削ぐことができると考えていた。
「さて、誰がどこにいるかなんてわからない以上、運任せな訳だが大丈夫かな?」
自分の知識の偏りに呆れながら歩みを進める狼。しかし、ふと気配を感じ立ち止まった。
「1人を数人が追いかけている?5人・・・いや6人か」
山賊に追われていると思われたが耳を澄ませ音を拾うとガシャガシャと鎧の音が聞こえた。
「1人を6人の兵士が追っているのか?」
少し気になり狼は気配を周囲に同調させその場に向かった。
気配をたどり、ついた場所そこには日本刀によく似た長刀を抱え走る少女を6人の弓兵が追いかけていた。
「あの娘があの長刀を盗んだから追われているのか?」
だがこの辺りには町などはない、少しおかしい、何より少女は所々怪我をしているようだった。
「はやく殺せよ!いつまでもだらだらやってんじゃねぇよ!」
「お前だって避けられてばっかじゃねーか!」
「あんなガキでも賊だ!遠慮してんじゃねぇぞ!」
「わかってるっての!」

「こうなったら」
1人の兵士が弓を放った。その矢は少女の腕を掠め木に刺さる。
すると少女の動きが徐々に鈍くなっていることに気がついた。
「・・毒、か。」
恐らくは先程の掠めた矢に毒が塗られていたのだろう。
「手こずらせやがって」
そう言って1人の兵士が少女に近づく。
「はぁ、はぁ、」
少女はフラフラしながら抱えていた長刀を抜き構える。
「はっ！そんな状態で何ができるってんだ？」
そんな少姿を見て兵士は笑っている。
「おとう、さん、も、お母さ、んも、みん、な、さい、ごまで戦った、だから！」
少女の言葉に狼は違和感を覚えた。最後まで戦った、それが意味することそれは
「莫大な税を要求する太守から物を奪い民に返した」
やはり、彼女らは義賊だったのだ。高額な税が払えない民達が泣く泣く金目の物を渡す。
彼女らは太守から金を奪い民達に渡していたようだ。
そんな兵士の言葉に言い返す元気は少女にはないようだが、少し長刀を握る手に力が入った。
「じゃあなお嬢ちゃん！」
そんな少女に兵士は至近距離より弓を放った。
少女はその矢を辛うじて交わし兵士を切りつけた。

だが、その一撃は兵士を殺せず、兵士の怒りを買って蹴り飛ばされ、長刀も手から離れた。
少女は立ち上がろうとするものの、立ち上がれず地に付したままだ。
兵士は長刀を拾い立ち上がろうと必死な少女の側まで行くと長刀

を振り上げ、降り下ろした。

キィィィィン！

「その辺りにしときなよ」

しかし、その長刀は少女に届かず狼が刹那で受け金属音が響いた。

「な、なんだこいつ!?」

突然現れた狼に動揺した兵士は怯む、その隙に狼は長刀を払いその勢いを生かし回転し刹那で兵士の腕を切り飛ばした。

「ギャァァ！」

兵士は腕を斬られ痛みにのたうちまわっている。

「なんだあのガキは?!」

「いきなり現れたぞ！」

残りの兵士が騒ぎ声をあげているのを気にせず長刀を拾い鞘に納め少女の体をお越し木に体を預けさせ長刀を渡してやった。

少女は何かを言おうとしているが声になっていない。

「クソガキが！」

仲間を斬られた兵士達は狼に向かって弓に矢ををつがえる。

だがその矢は放たれることはなかった。

縮地を使い接近した狼は５人の弓の弦を断ち切った。

「「「「「なっ!?」」」」」

５人の兵士は突然の事に理解が追いつかなかった。

自分達が狙った相手が突然自分のそばに現れ弓を壊されたのだ。

「・・さようなら」

兵士が驚いてることを気にせず左下から右上に刹那を振るい１人、その勢いをのまま右にいた兵士の首を突き２人、２人目の持っていた

弓を首に突き刺し3人、突き刺した刹那を抜く勢いそのままに投げ心臓を貫き4人、その兵士を足場に最後まで兵士に向かって飛び抜いた刹那で5人目の首を跳ねた。
「さて、あとは・・・」
5人の兵士を殺し血を払い刹那を鞘に納め振り向く。
「あんたもやるのか？」
誰もいない方向に向かって声をかける狼。
すると木の影から1人の女性が現れた。
紫の髪、ピンクの服に緑のマント（？）を着け弓を持った胸の大きな女性だ。
「いいえ、私は争う気はありません」
そう言ってフフフと笑う女性、そんな女性に狼がエロスを感じたのは内緒だ。
「だけどこの娘を追ってきたんだろ？」
「ええ、だけど殺そうと思っていたわけじゃないの」
そう言った女性の声からは悪意を感じられなかった。狼は少女のもとにいき抱えあげる。
「…貴方の名前を教えて貰えないかしら？」
立ち去ろうとする狼に女性が声をかける。
「名を訪ねるときは自分からじゃない？」
「フフフ、そうね貴方の言うとおりね、私は黄忠漢升よ」
黄忠漢升、三国でも1、2を争う弓の名手。
「俺は姜維伯約です。じゃあまたどこかで黄忠のお姉さん」
自分の名を告げると走り出す狼、それを眺める黄忠。
黄忠は少女を追って来たものの幼い娘を手にかける事に躊躇いがあったがゆえ見逃した。
いや、それもあるが、狼の動きを見て自分だけでは難しいと感じていた。
「まさに麒麟児、噂以上だわ」
そう言って来た道を引き返し始めた。

この出会いがどうなるのかは神のみぞ知る。

8話

夜の森を狼は少女を抱え走りながら。
狼は少し焦っていた。傷なら自分の治癒功で直せるが毒の治療はできないのだ。狼自身毒への耐性をつけているため解毒の知識に疎かった。
しかしその症状に狼は心当たりがあった夏虫冬草（実在しませんたぶん）冬虫夏草によく似た植物でその根には毒があり高熱、目眩、吐き気といった症状がでる。
少女の症状はまさにそれだった。
「こんなことなら解毒の方法も勉強するべきだった」
そんな愚痴をこぼす狼の前方に火の明かりが見えた。
目を凝らすと老人と男の子供が焚き火をしているのが見えた。
「自分が知らななら他人に聞くしかないよな」
そう言いながら前方の二人組のところまで急いだ。

「突然すみません！夏虫冬草の解毒の方法をしりませんか？」
その場につくなり狼は二人組のうちの老人に向かってたずねた。
最初は驚いた二人組だが狼が抱えている少女を見て状況を把握したようだ。
「ふむ、夏虫冬草か烈、お前がやってみなさい」
老人は顎の髭を触りながら隣の赤い髪の男の子に向かってそう言った
「わかった。」
老人に一言われ立ち上がり懐から1本の針を取り出し。
「針？」
「左様、わしら五斗米道を扱う者は針で治療を行うのじゃ。」
五斗米道・・・・まあ医術関係だ。
「ここじゃない、ここでもない、」
赤い髪の男の子は少女をみながらぶつぶつと何かを言っている

正直あれが大人なら変態だ。
「ここだ!!」
少年はある一点を見つめ針を振り上げる。
「ご老人、あれは大丈夫なんですか?」
「烈は少し熱い子じゃが大丈夫じゃ」
流石に不安を覚えた狼が老人に聞くが、大丈夫だと言うので黙って見ている、
「いくぞ〜!五斗米道〜!」
男の子の針先に氣が集中しているのが見えた狼はその氣で何をしようとしているのかわからなかった。
そんな狼をよそに男の子は気合いの掛け声と共に針を少女の腹部に刺した。
すると徐々に少女の呼吸は落ち着き表情も楽になっていった。
「まさか氣で毒を殺したのか?」
「ほう、その通りじゃ。よくわかったのぅ」
狼にはそうでわないかという考えがあっただけで確証があったわけでわなかった。
「自分も氣を使えるのでもしかしたらと思っただけです」
「その歳で氣を使えるだけで大したものじゃよ」
ふぉっふぉっふぉっと笑う老人、そこに治療?終えた男の子が近よってきた。
「もうあの娘は大丈夫なのか?」
「ああ、もう大丈夫だ。体内の毒の元凶を滅した」
「なんじゃお主その娘の知り合いじゃないのか?」
老人の質問にたいし狼事情を説明した。
そうすると、老人は顔をしかめた。
「なるほどのう、ならば失敗したわい」
「どういうことです?」
「わしらは丁度先日劉表に呼ばれてあやつの病を観に行ったんじゃよ。そんなやつじゃと判っとれば治すんじゃなかったわい」
そう言って老人は申し訳なさそうに眠っている少女の頭を撫でた。

「しかし師匠、俺達医者は人を治すのが使命です！病人がいたら治すのが当たり前です！」
「烈、それは「ちがう！」・・・」
男の子言葉に老人が反論しようとしたが、そこに狼がわってはいった。
た
「お前は間違ってる。お前は医者は人を治すのが使命だと言った。じゃお前が治療した賊がまた民を殺したときお前はどうする？殺された民を生き返らせるのか？その肉親の怒りを悲しみをお前は受け止められるのか？答えは不可能だ!!死んだものは生き返らない！残された肉親の怒りと悲しみ、心の傷は消えたりはしない！お前が助けた命が多くの命を奪う可能性があるんだ！それを理解できないならお前に医者を名乗る資格なんてない！」
珍しく声をあげ激しく怒鳴る狼、前世の職業上、世界の汚れた部分に関わってきた狼は、そういうところを嫌というほど知っていた。理不尽な死にかたを見てきた。偽りの希望にすがる者を見てきた。生きる価値のない、腐ったグズどもを見て殺してきた。
殺しを悪だというなら、自分は悪で構わないと。
目には目を、歯には歯を、悪には悪を。
そんな覚悟で前世を生きてきた狼には、男の子に言葉が認められなかった。
「・・・」
「烈よ、この坊主の言うておることは正しい。お前にはまだ難しいかもしれん。じゃがこれから医者をするいじょうは理解せねばならん。この坊主は烈よりも世界を見てきたんじゃろう。しかし若いのに苦労して来たようじゃなお前さんは」
「坊主でもお前さんでもありません、ご老人。姜維伯約です」
黙る男の子に頭を撫でながら声をかける老人に狼は名乗った。
「そうか、お主がそうじゃたか。確かに麒麟児じゃ」
そうかそうか頷き納得したような老人。
「あまり遅くまで起きていては体に悪い寝るとしよう」

「はい師匠」
「そうですね」
老人の提案に賛同し眠りについた。

夜が明け狼は3人からあまり離れない所で木の実などを集め3人の所に戻った。
兵士が追ってきているとは思ってはいなかったが念のため警戒していた狼は眠っていなかった。

3人のもとに戻ると老人と男の子は起きたが、まだ少女は眠っていた。
ひとまず3人は朝食を食べた。朝食を食べ終えると老人は狼にたずねた。
「伯約、これからどうするつもりじゃ？」
「もともと長沙を目指していたので長沙にいくつもりですが、この娘を連れてこの娘が親と別れた所に行ってみようと思います。可能性は低いですが生きている可能性もありますから」

そう言いながらまだ眠る少女の頭を撫でてやる。
「そうか、ではお別れじゃな。」
「はい。」
「姜維」
「ん？えーと」
男の子に呼ばれ狼は男の子に返事を返そうとしたが、自己紹介をしていないため名前がわからなかった。
「俺は華佗、華佗元化だ。」
まさか神医と呼ばれる華元化に説教していたのか!?と狼は少々

焦った。
「俺はまだ姜維の言ったこと理解できない。だが理解しようと努力するつもりだ。」
「…そうか」
そう言った華佗の言葉を聞き狼はほっとした。
神医と呼ばれた人間が考え直してくれたて本当によかったと。

「それじゃあ俺達はこれで」
そう言って寝ている少女を背負い二人に別れを告げる。
「うむ、元気でな」
「またな姜維」

ひとまず長沙を目指し歩き始める。

「あぅあぅ」
歩き始め太陽が真上にきた頃、背の少女が声を漏らした。
「起きたか？」
「あれ？私は」
少女に声をかけたが少女は現状を飲み込めなかった。
「森のなかで追われて毒をうけた君を俺が助けた」
「っ!!」
狼が助けたことを説明すると少女は思い出し、息を飲んだ。
「貴方が助けてくれたのは微かに覚えてます。ですがなぜ助けたんですか？」
「兵士と君の会話から君は義賊なのはわかったから。何より俺は民に

重税を強いて私腹を肥やすそんな屑が嫌いだから」
少女はなぜ助けてくれたのかとたずね、狼はそれに答えた。
「俺の名前は姜維伯約、出来れば君の名前を教えてくれないか？」
「すみません、私は姓は周、名は泰、字は幼平、真名は明命です！」

周泰幼平、元々は水賊だったが孫策に帰順しその後孫権に仕えた武将。
まさかこんなところで出会えるなんてな、と狼は思っていた。
「真名までよかったのか？」
「はい！姜維様は命の恩人ですから！」
様付け・・・だと?!と驚いた。
「・・・なら俺の真名は狼だ」
「はい！狼様！」
「いや、様はいらないから」
様付けを否定され明命は落ち込む
「・・だめ、ですか？」
「別にえらいわけじゃ」
もう一度言われ目には涙がたまる。
「あぅあぅ」
「明命の好きにしたらいい」
結果狼が折れた。
「はい！」
様付けを許された明命は顔の周りに花が見えるほどの笑顔で喜んだ。

9話

明命と真名を交換したあと二人で明命が両親や仲間と別れた場所に向かった。
わずかな可能性だが生きている者がいるかもしれないからだ。
しかし、現実は甘くはなかった。明命の両親も仲間たちも殺されていた、人数にして５０名足らず、たったこれだけの人数で戦って来たのかと狼は驚いていた。
小さな村を襲うならば十分な人数だ、たが領主相手にこれだけの人数で戦いを挑んでいたとはよほどの覚悟だったのだろう。
狼がそう考えていると明命は両親の遺体の傍らで泣いていた。
まだ幼い明命には辛すぎる現実、狼が近付くと明命は狼に泣きつき、狼はその小さな背を優しくなで続けた。
暫くなき続けた明命は赤くなった目から涙を拭い、狼にもう大丈夫ですと言った。
そのあと二人で皆の遺体を埋め、そこに花を添え手を合わせ目を閉じ冥福を祈った。
目を開き狼は明命に話しかけた。
「明命、これからどうするつもりなんだ?」
家族と仲間を失った明命の心配する狼、明命の若さで天涯孤独になるものが居ないわけではないが、やはり心配だったのだ。
「私は、狼様に着いていきたいです!・・・・・ダメでしょうか。」
狼の質問に対して共に行きたいと明命は言った。
ダメでしょうかと聞く明命は目を潤ませ狼をみる。二人の身長差から必然的に上目遣いになっていた。
上目遣い＋涙目＋可愛い娘＝断りずらいが成のは言わずともである。
だが優秀な武将が仲間にするという目的を達成できできる訳であって断る理由はなかった。
明命は見た限り狼と同じスピードタイプ、いい隠密になると狼は考えていた。

「駄目じゃない、これからよろしくな明命。」
「はい！」
明命が着いてくることを承諾し手を差し出す狼、明命はパッと表情を明るくし笑顔で返事をして狼の手をとった。

そこから再び長沙を目指し始めた狼達、しかしそこで狼はあることに気がつき悩んでいた。
女の子に野宿をさせるのは不味くないか？と。
しかし、子供二人で宿を借りることができるのか？おそらく無理である。
どうするかと悩む狼をみて明命が声をかけた。

「狼様なにか悩みごとですか？」
「いや、俺は訳あって今まで野宿して旅をしてきたけど、明命にまでそれを強いるのはどうかと思ってね」
そう言うことですか、と納得したような明命。
「狼様と一緒なら大丈夫です！それに私も強くなりたいです！」
なにが大丈夫なのかいまいちわからない狼だが明命がそう言うならばと納得したが、可能な限り寝床を確保しようと思った。

明命の気の修行をしながら長沙を目指し一週間で到着した。
明命は身体強化と気配の操作に長けているだろうとよんだ狼はその二つを中心に修行を行っていた。
修行を行い始めたばかりではあるが明命は筋がよく直ぐに気の扱い方を覚えた、当然まだまだがこの調子でいけば2年もかからず優秀な隠密になれるだろう。

長沙の町を歩く狼と明命、幼い兄妹が歩いているようにも見えるだろう・・・持っている武器さえなければ・・・
やはり幼い子供が武器を所有していれば目立つ、視線を感じながら歩いていると正面から大柄な男が二人に近付いてきた。
「おちびちゃん達、そんなもあぶねーもん持ってちゃいけねーな、俺が貰ってやるよ」
近付いてきた男は突然武器を寄越せといいだした。
二人は当然それを拒否した。
「お断りします。」
「私もです。」
「いいから渡せ！」
二人が拒否すると男は二人に詰め寄った。
男が詰め寄ってきた瞬間に狼は男に接近し足を払う、男は派手に顔から地面に突っ込んだ。
それを見た周りの人が笑った。
男は顔を赤くし立ち上がり恥を掻かされたことに怒りを露にしている。
「このガキがぁ～！」
怒った男は狼に殴りかかるが狼は拳を避ける。
その後も男は殴りかかるが狼は避けつづけ、掠りもしなかった、拳が当たらない男は苛立ち標的を明命へと替えた。
「情けないおっさんだな」

自分よりもはるかに幼い女の子に拳を振り上げる姿に情けなさと怒りを覚えた。
狼は履き物を瞬時に脱ぎ捨て男の足を後ろから右足で払い、その勢いを殺さず回り垂直に左足で男の背を蹴りあげた、そして蹴りあげた左足の指で男の服を掴み引っ張り、その勢いを利用して前方に回転し男の腹に踵を落とした。
「げはぁ！」

男は奇声を吐きながら気を失った。
それを見た周囲の人達から歓声があがる。明命は隣でピョンピョンとはね「すごいです！すごいです！」と言っている。
そんな中、狼は二つの強い気配に気が付く。
『なんだこの気配？』
感じた気配の方を向くと、二つの気配が近付いてきた。
「見事なもんだ」
「確かにそうですな」
近付いてきたのは桃色の長髪の女性と薄い紫の髪の女性の二人だった。

１０話

狼達の前に現れた二人のうちの桃色髪の女性がまじまじと狼をみる。
「よくもまあ、あんな芸当やってのけたもんだ。自分の倍以上の体格の男を蹴りあげる脚力、何より足で相手の服を掴むなんて易々とできることじゃない」
桃色髪の女性は狼の行動の難しさを理解しているのだろう、それゆえに狼を誉めたのだ。
「確かに堅殿の言う通りじゃな、自分の目で見ていなければ信じられんじゃろうな。」
続いて薄い紫色の髪の女性も思ったことを口にした。
「さっきからなんですか？それにどちら様ですか？」
自分達のいいたことを言う女性達に狼がそう言うと周りがざわめいた。
「ん？あー！悪いね、私は孫堅だ。」
「儂は黄蓋じゃ。」

狼に話しかけた二人は孫堅に黄蓋だった、周りのざわめきも当然だなと狼は納得した。
「孫堅様と黄蓋様とは知らず、ご無礼をお許しください」
「頭をあげろ、もとはといえば私がまだ長沙を纏めきれていないせいだ。」
そう言って頭を下げ謝罪をする狼に孫堅は頭を上げるように言った。
「堅殿もこう言っておるんじゃ頭をあげい、ところでお主らは二人なのか？」
「はい、そうです！」
黄蓋も頭をあげるように促す、そして幼い子供が二人でいることが気になったのか二人にたずねそれに、明命が答えた。
「お主らその年で駆け落ちはないじゃろう」

「はぅわ!?そ、そんなじゃありません！」
「なんじゃ恋仲ではないのか？」
　黄蓋の駆け落ち発言を驚き顔を赤くしながらも否定した明命、しかし恋仲ではないのか？と聞かれたあと黙り何かぶつぶつと言っている。
「あはははは、そっちの娘は気があるみたいじゃないか、あんたはどうなんだい天水の麒麟児、姜維伯約」
　明命の様子を愉快そうに笑う孫堅、しかしそのあとの言葉に狼は驚いた。
「なんで俺が天水の麒麟児だと言うんですか？」
　自分はまだなのっていない、多くの場所でなを名乗っていない、容姿で判断するのも無理だろう、と。
「なんだそんなことかい、勘だよ、勘。あんたの反応からして間違い無さそうだがね。」
　勘だよと言う孫堅の言葉に驚いた。勘で人をあてるのなんてどういう勘だよと。
「まあいい、あんたら私の屋敷にくるといい会わせたいやつもいるしな。」
「・・・はい、わかりました。」
　孫堅の誘いに悩みながらも狼は応じ明命も頷いた。
　しかし会わせたいやつとはいったい誰だろうかと狼は考えた、おそらく孫策、孫権、周瑜、程普その辺りではないかと思う。
「ふむ、ならば姜維、後で儂と手合わせするぞ」
「俺と手合わせしても面白くないのでは？」
「何を言うておる、先の動きが本気でないのは見ればわかる、儂に同じ事が出来なくても他にやりようがあるじゃろう」
　手合わせすると言い出した黄蓋の誘いをやんわりと断ろうとしたが、先の動きを見られていたので不可能だった。そんなやり取りをしながら孫堅の屋敷に向かった。

孫堅の屋敷に着き孫堅は家の者に誰かを連れてくるように指示をだした。
その間に中庭に移動し黄蓋と手合わせをすることになった。
お互いに刃びきした模擬刀を持つ。
「黄蓋様は弓ではないのですか？」
「確かに弓の方が得意じゃが剣も使える心配無用じゃ。お主こそ目隠しは取らんで良いのか？」
「いえ、取ります。そこまで自惚れていませんから。明命持っててくれ。」
そう言うと目隠しを外し明命に渡す。
「頑張ってください狼様！」
「ああ、頑張るさ」
明命の言葉に頭を撫でながら狼はこたえた。
全盛期に及ばない今、賊相手程度なら問題ないが猛将相手は初めてである、どれだけ手札を切るかも悩むところだ、あくまで手合わせ、手の内力量をさらしすぎるのも宜しくはない。
だが明命に頑張るといった以上情けない姿は見せられなくなった。
「判定は私がする、敗けを認めるか有効打が入ったら敗けだ、始め！」
孫堅の合図で手合わせが始まった。
黄蓋は模擬刀を正眼に構えるに対し、狼は模擬刀を左手で逆手にもち右足を半歩マエニダス、
体勢は立ったまま攻撃をする姿勢ではなかった。
「ふむ、珍しい構えじゃな、先手は譲ってやろう」
黄蓋は正直な感想を口にする。その構えは異質、防戦からの反撃狙いかと思い先手を譲るが構えは変わらなかった。
「ではお言葉に甘えて」
その言葉と共に狼は行動をおこした。
狼は持っていた模擬刀を上に投げたのだ。黄蓋の視線が一瞬狼から離れた。
その時、ザッと音がなり黄蓋はしまった、と思い急いで視線を戻す、

先の戦いぶりで狼が体術も使えるとわかっていたからだ。この行動は誘導だと確信したのだ。慌てて視線を戻した先に・狼は・・・・・・・

まだいた。下げた左足で地面を蹴った後であろう格好で。

その事に戸惑う黄蓋は動けなかった。しかしそれが狼の狙いだった。

狼がニヤリと笑った直後狼の勝利宣言があがった。

11話

手合わせが終わり今は中庭にある机でお茶を飲んでいるのだが、黄蓋が手合わせの内容に未だに納得できず不満げだった。
「祭いつまでも不貞腐れてるな」
「しかし夏蓮殿、やはり納得仕方い、儂としては打ち合いがしたかったのじゃからな」
狼との手合わせの内容に納得ができまいらしい。
先手を譲られた狼はまず模擬刀を上に投げた、黄蓋はそれに一瞬気をとられ視線を逸らした。
そこで狼は少し下げた左足で地面を蹴り音をだし、それに黄蓋は反応し視線を戻すと狼はまだいる。
その自身の予想した事と違うことに驚き黄蓋はその場から動けず、そこに狼が投げた模擬刀の刃の部分が黄蓋の肩に落ちてきたのだ。
狼は模擬刀を真上に投げたのではなく山なりに少し前方に投げたのだ。
狼の行動は黄蓋をその場に止めるための行動だったのだ。
「いい歳して子供の策に嵌まった祭が悪い、まあ打ち合いが見てみたかったのも事実だけどな」
そう言うと狼を見る孫堅。
「そう言われましても、仕方ないじゃないですか、打ち合っても勝てそうにありませんでしたし、勝つために考えた結果なんですから」
狼は俺がいけなかったのかと考えた。
やはり手の内をさらすのを避けあえて奇策を行ったのだ。
「お母さま用ってなに?」
「夏蓮様お呼びでしょうか」
そんな中、二人の女の子が近付いて孫堅に話しかけた。
「おお来たか雪蓮、冥林。」
孫堅と同じ桃色髪の女の子はおそらく孫策、黒髪眼鏡の女の子は周瑜だろうかと狼は考えていた。二人とも狼より少し歳上にみえた。
「ああ、お前達をこいつに逢わせたくてな」

そういって狼の頭をわしゃわしゃと撫でた。
「ちょ！止めてください孫堅様！」
それを狼はやめるように訴えた。
「この子ですか？」
「ふーん」
狼を見て考え始めた周瑜、一方で何かを悟った孫策。
「この子が前に噂になった天水の麒麟児？」
「ほぅ何処で気付いた雪蓮？」
「え？勘だけど？」
やだなーお母さまと言わんばかりに孫策が答えた
「流石私の娘だな。」
「普通はわかりませんぞ？」
「そうです」
黄蓋と周瑜は、はぁーとため息をつきながらあきれている。
この親あってのこの子かと狼と明命は思っていた。
「気になってたんだがお前さんは何て言うんだい？」
「周幼平といいます。」
ふと明命に名をたずねた孫堅、明命は素直に名乗った。が、そこで孫堅と黄蓋の顔付きが変わった。
「確か劉表が厄介がってた賊の中に幼いながらにすばしっこい奴がいるって聞いたことがある」
「その者の名が確か周幼平じゃった。偶然かのう？」
そう言って狼と明命をみる孫堅と黄蓋。
さてどうしたものかと狼はかんがえた。自分の領地でないとはいえ、賊だと判れば捕らえられる可能性はある。しかしそんな狼の考えを知らず明命は答えた。
「そうです、私がその周幼平です。」
「ほぅ潔いｎ「私は！」むぅ？」
黄蓋の言葉に明命が言葉を被せ話をつづけた。
「私達は皆誇りを持って生きてきました！間違った事をしたつもりもありません。それでも私を捕らえられるのでしたら・・」

そこで明命は後ろに飛び下がり少し前傾姿勢で長刀にに手をかけた。
「敵わずとも全力で抗って見せます！」
「ほぅ面白い」
明命の言葉に笑いながら立ち上がり模擬刀を手にする黄蓋。
素直なのが明命のいいことだ、短い時間だが一緒にいてそれは知っている。
自分が、自分達のしてきたことが、其ほどまでに否定されなければならないのかという悔しさがあるのもわかる。
が、ここで孫堅と敵対するのはよろしくない。ふと孫堅を見ると楽しそうに笑っている。
ここで狼は理解した、孫堅自身は明命をとらえる気がない、先の手合わせで見れなかった実力を見せろと言っているのだと。黄蓋を止めて見せろと。
狼は、はぁ～とため息をついた次の瞬間明命と黄蓋の間に移動した。
「なっ!?」
「へぇ～♪」
その動きに孫策と周瑜は驚きの声をあげ、孫堅は楽しそな声をあげている。
「そこまでにしてください黄蓋様、先の手合わせとは違います。でなければ俺も刹那を抜かなくてはいけません。」
そういって腰に差した刹那に手をかけた。
「面白い儂に勝てると思っておるのか？いいおるのぅ十程の童が」
「・・・狼様」
狼の言葉に少しイラッとした黄蓋、それを見て明命が不安そうに狼の着流しを掴んだ。
「明命の気持ちの全てはわかってやれないが、明命達がやってきたことは間違ってなんかない、その気持ちを明命が貫き通すにはまだ力不足だ、たから今はまだ俺が守ってやる。」
なっ、と狼は明命に笑いかけそれに明命は少し目を潤ませながら、

はい！と答えた。
「格好つけとるが本気で勝てるつもりか？」
「はぁ、あまり嘗めない方がいいですよ、天水の麒麟児の名はだてじゃない無いんですから、ね？」
　そう言って殺気を放つ狼、その殺気はとても十歳の子供が放つものではない鋭さだった？
　その殺気に黄蓋は冷や汗が流れた。
『なんじゃこやつの殺気は!?これで齢十程の童が放つ殺気か？いかんのぅこれは儂に勝てるというのもあながち嘘では無さそうじゃな、これが天水の麒麟児か。』
　黄蓋は内心焦り天水の麒麟児にたいする己の評価が過少評価だったと認識を改めた。
「まあこんなもんでいいか、祭やめな、お前達も武器から手を引きな、私は周幼平を捕らえるつもりはない。」
　緊迫した空気を孫堅が破った。
「はぁ、孫堅様も意地が悪いですよ？」
「まあいいじゃないか、それにしても大した殺気だったよ、認識を改めなくちゃいけないね。」
　狼は呆れ、孫堅はわらっていた。が他の四人は納得がいかない。
「夏蓮様どういうことですか？」
「お母さま？」
「説明いただけますな夏蓮殿？」
「え～と狼様？」
「孫堅様は明命達を認めてた、だけど俺に黄蓋様を止めて見せろと言ったんだよ。」
　理解できない明命に狼が説明してあげた。
「そうゆうことだ、悪いのは劉表達でお前さん達は間違っちゃいなかった。しかしあんたが一人で姜維といるってことは」
「・・・はい、先日劉表軍に襲撃され、私以外は・・・私も追っ手に殺されかけた所を狼様に助けていただきました。」
「そうだったかい、悪かったね嫌なことを思い出させちまって」

孫堅の言葉に俯きながら答え、その真実を知った孫堅は謝罪した。
「いえ、孫堅様が謝られることはありません」
孫堅の謝罪に笑顔で返すがやはりその目は涙で潤んでいた。
「あんた達今日は家に泊まりな、いいね？拒否権はないよ♪」
「流石お母さまいい考えだわ」
「私も天水の麒麟児と話をしてみたいですね」
「そうせいそうせい、甘えられる時に甘えぃ。」
孫堅の提案に他の三人も賛同し逃げ場はないようだった。
「わかりました。お言葉に甘えさせてもらおう明命」
「はい！ありがとうございます！」
そうしてお泊まりが決定したのだった。

12話

狼達が孫堅の屋敷に泊まり始めてから2週間が経過していた。
狼達は早々に出ていくつもりだったのが、孫堅達に気に入られてしまったようで、出ていけないでいた。しかし旅を再開したい狼達は今晩脱出を計画していた。
この2週間街を散々つれ回され街の構造は理解している。
計画は練った、ただ唯一の不安要素は夏蓮と雪蓮の異常なまでな勘である。
因みに孫堅、孫策、周瑜、黄蓋とは真名を交換した。
はっきり言って二人の勘は勘と片付けていいレベルではない、はっきり言って異常である。
「いくぞ明命」
「はい」
小声で確認する狼と明命、置き手紙を残し部屋を出た。木に登り塀を越え走り出す。スピード勝負で負けるつもりはないが予定外の可能性があるかもしれない、その予感は的中していた。
「嘘だろ？冗談きついぞ」
「あ、あはは」
脱出地点に着いた二人を待っていたのは脱出地点に笑いながら立っている夏蓮と祭だった。
「いやー流石は私だな♪」
「確かそうですな」
嬉しそうに笑っている二人。
「勘弁してくださいよ夏蓮様、祭様」
「なら私に支えな狼、明命」
「だから俺達は旅がしたいんですって」
「それが終わってからでもいいぞ？」
「それは約束出来ませんって」
「なら今から支えろ」
平行線である。どちらも退かず決着がつかない。

「仕方ない、行くぞ明命！」
「はい！狼様！」
二人は走り出す。
狼の前を明命が走り夏蓮と祭の手前八メートルあたりで勢いを殺さず飛び上がり、狼は一回転し蹴りを放つ、その蹴りに明命がのり一気に跳躍、それを見上げる夏蓮と祭、そして明命は高い塀の上に着地し少し遅れて狼が着地した。狼は明命の長刀、魂切に鋼糸を繋ぎ、明命を飛ばした勢いで自身も跳んだのだ。しかし夏蓮は慌てていなかった、なぜなら。
「何で外に雪蓮と冥林がいるんだよｏｒｚ　」
「・・・もう驚きません」
狼は思わずｏｒｚのポーズ、明命もうなだれている。
「逃がさないわよ狼、明命」
「そうだぞ二人とも」
そんな二人に雪蓮と冥林はいい放った。
「かくなるうえは！」
そう言って狼は指笛を吹く、そして耳をすます。
「何をしてるのしら？」
「さあな、私にはわからん」

ユイ

来た

ユユユイ

もう少し

ユユユユユイ

今！

ピユユユユユイ！

狼が明命を抱え塀の上から飛び降りたと同時に一羽の燕が現れた。
颯だ。颯は雪蓮と冥林の側で飛び回り二人を牽制する。
「ちょ！なによこの燕⁉」
「まさか狼の仕業か⁉」
二人は武器を持っておらず手で必死に応戦していた。
だが素手で飛び回る燕を捕まえるなのど雲を掴むような話だ。
いくら雪蓮の勘が鋭くとも颯にも野生の勘がある。
颯が二人を牽制している隙に狼達は逃走に成功、自由（？）をかちとったのだった。

「当分長沙には近づきたくないな」
「はい。私もです」
二人は項垂れながらそう言った。
そこに足止めをしていた颯が戻ってきて狼の肩に止まった。
「助かったよ颯」
「ピュピュイ」
狼が礼をいい颯をなでてやると、颯は嬉しそうな声をあげた。

「狼様、これからどうしますか?」
「そうだな、交州、楊州、豫州、徐州と言った感じに回って幽州までいこうと思ってる」
下から上へ向かい豫州で曹操をみてから幽州を目指すのが狼の計画であった。
しかし、幽州に用があるわけではなく、別の場所に用があった。
「まあ、万に一つもあるさっさと荊州をでてしまうぞ」
「はい!」
「ピュイ!」
神がかった二人の勘を警戒し歩みを始めた。

！ ン ゾ ム リ ク グ ン キ

二人は交州、楊州を三年掛けてめぐった。
その旅の最中、襲ってきた山賊を討伐したり、村を襲っている賊を倒しているうちに狼は銀の幻影と呼ばれ、明命は黒き瞬神と呼ばれるようになった。

「漸く豫州に着いたな、黒き瞬神様？」
「そうですねって、その呼び方は止めてください！狼様だって銀の幻影じゃないですか！」
ふざけた会話をしながら歩く二人。恥ずかしさからか明命が話題を変えた。
「雪兎（ゆきと）と梨花（りーふぁ）は元気でしょうか？」
「そうだな、元気にしてるさ。」
明命の言った、雪兎と梨花とは旅の最中で仲良くなった太史慈と荀攸のことだ。
雪兎は孔融の所に行く事が内定していたし、梨花は親の許しが出ず旅に出れなかった。
「さあ、二人を思い出すのも程々にして先に進もうか」
「はい！狼様！」

そうして二人はまだ見ぬ後に覇王と呼ばれる曹操に会うため旅を続けるのだった。

13話

豫州のとある街、狼達はこの街に曹操がいると聞き付けやって来ていた。

街を歩き曹操が住む屋敷を見つけたが突然訪ねたとしても門前払いされるのがおちだろう。

「話をしてみたいから忍び込んだら不味いな、街を彷徨いて出てくるのを待つか」

「では、もうお昼ですしご飯にしましょう狼様」

狼が忍び込むのを断念すると、明命が手をパンと合わせご飯を食べることを提案した。

「そうするか。じゃあ明命案内よろしくな、行ってみたい店があったんだろ？」

「はぅわ!?狼様はお見通しだったんですか？」

「通りを歩いてる時に明命の視線が止まった店があったからな。」

「あぅあぅ／／／」

顔を赤くし下を向いた明命を笑いながら狼はあるきだした。

「はぁ～♪食べるのが勿体ないです！」

そう言って明命が見ているのは猫の顔をした饅頭である。

この店では普通の料理の他に甘味がありその中の名物が猫の顔をした饅頭である。

しかし幸せそうな明命と対照的に狼はお茶を啜りながら不満顔だった。

『青椒肉絲は材料の火の入りかたがまちまちだった、炒飯も水分が飛ばし切れてなくてベタついてた』

食べた料理に不満があったのだ。
前世では自分で料理をしていたためプロ顔負けの腕をしていた狼からして許せなかったようだ。
「この程度の腕でよく店を出せたわね」
「なんだと!!」
狼がそんなことを思っていると怒鳴り声が店内に響いた。
「もう一度言ってみやがれ!」
「ええ、何度だって言ってあげるわ。よくこの程度の腕でよく店を出せたものね」
店長らしき男に金髪で巻き髪の少女が文句をいい、それにたいして店長らしき男は顔を真っ赤して怒鳴っている。
「炒め物は火をつかえきれずに余計な水分が残っているし、味付けも辛味で誤魔化してるわね」
その言葉に店長らしき男は言葉に勢いがなくなった。
「自覚はあるみたいね。猫の顔をした饅頭で客を呼び込んでるみたいだけど、料理の腕がこの程度なら、客足が落ちるのも時間の問題ね」
さらに言い放たれた少女の言葉に肩を落とし意気消沈して調理場に戻って行ってしまった。
「よくもまあ、あそこまではっきり言うもんだ」
その少女の言葉に共感が持てはするがあそこまではっきり言わなくてもいいんじゃないか?と思えなくもなかった。
「行くわよ春蘭、秋蘭」
「「はい、華琳さま!」」

その少女は立ち上がり同席していた黒髪と青髪の女性の真名?を呼び店を出ていく。
その光景をみて狼は金髪の少女が曹操だと確信した。
「明命追うぞ」
「はい!」

三人を追って二人も店を出た。

「よくあれだけ率直に言えるもんだ。俺もそう思ったけどあそこまで言えないな」

「あら?・貴方はなかなか分かるわね。でもはっきり言った方があの店長のためになるでしょう?・」

歩いている曹操と思われる少女に話しかけた狼に少女は言葉を返した。

「誰だ貴様!・気安く華琳さまに話しかけるとは!・」

黒髪の少女が狼に食って掛かる。

「止めなさい春蘭、それにしても貴方その格好といい味覚の良さといい面白いわね?・私は曹操、字は孟徳、貴方名前を聞かせてもらえないかしら?・」

「華琳さま!?何故そんなやつの名を!?」

「止めないか姉者」

「だが、秋蘭!・」

その少女は狼の予想通り曹孟徳その人だった。曹操が名乗り狼の名を聞くが黒髪がまたしても声をあげるが青髪が止める。

「礼儀正しさ、流石は曹家令嬢だ、俺は姜維、字は伯約だ。」

「そう、あなたがあの天水の麒麟児なのね。よければ家にこないかしら?・もてなさせてもらうわよ?・」

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

「か、華琳さま!?」

「春蘭、聞く耳もたないわよ。」

曹操は狼の名を聞き驚いたが、すぐに嬉しそうな顔をし家に来ないかと誘い狼はそれに応じた。

それに黒髪が反対しようとしたが曹操に止められてしまった。

そして五人は歩き出した。

曹操の屋敷に付き客室でお茶を飲み始め曹操が口を開いた。
「天水の麒麟児の由来の話、あれは真実なのかしら？」
「曹操殿はどんな噂を聞いているんだ？」
「私は貴方が齢六にして山賊三十人を一人で討ち果たしたと聞いているわ」
「まさか、ありえません!?」
「確かに信じがたいことかと」
天水の麒麟児と狼が呼ばれる理由の真偽を曹操が聞き狼は聞いた話の内容をたずね、曹操が聞いた話を話すと黒髪と青髪の女性は信じられないと言った感じだった。
「正確には三十五人だけどな」
「そう、本当なのね。」
狼の答えを聞き狼心底楽しそうな笑みを浮かべる曹操。
「ありえません！おい貴様！表に出ろ！」
「止めなさい、春蘭。姜維、もう一つ聞くわ、貴方が銀の幻影ね？そうなるとそっちの娘が黒き瞬神かしら？」
その言葉に驚きの表情を浮かべる黒髪と青髪の女性。
「よくわかったな？そう、こちらの御方が黒き瞬神様だ。」
「止めてください狼様！恥ずかしいです！」
そんな二人をよそに明命をからかう狼、そしてそれをやめるように訴える明命
「そう、貴方たち私に支えなさい」
「な、何を言われるのですか華琳さま!?」
「また華琳さまの悪い癖が」
「何か嫌な予感が」
「鬼ごっこはもう嫌です」
その言葉に黒髪は抗議し、青髪はまたかと飽きれ、狼と明命は孫家を思いだし身震いをした。

１４話

「さあかかってこい！華琳さまの剣である私が叩き斬ってやる！」
「いや、叩き斬ってたら駄目だからな？」
狼と黒髪の女性夏候惇が中庭で模擬刀を構え向かい合っている。
何故こうなかったと言えば。
曹操が狼達を勧誘→夏候惇が反対し狼を馬鹿にする→明命がそれに反論→宜しいならば決闘だ表に出ろ→模擬刀を構え向かい合う←今ここである
「相手に一撃加えた方の勝ちよ、姜維が負けたら私に支え、春蘭が負けたら諦めるそれでいいわね」
「見ててください華琳さま！私がこんなやつに負けるはずがありません！」
「狼様！頑張って下さい！狼様なら楽勝です！」
夏候惇の言葉に対抗してなのか、明命は手をブンブンと振ってそう言っている
内心明命がやる流れじゃないのか？と思ったりもしたが我慢した。
「では始め！」
曹操が開始を告げる。
「さあこい！貴様など一ｇ」
狼もいい加減馬鹿にされるのも飽き飽きしていた、故に速攻で勝負を決めた。
夏候惇の左肩に突きを放ち模擬刀の側面で模擬刀を持つ手を叩くすると夏候惇は簡単に模擬刀を落とした。狼が突いたポイントは突かれると一瞬力が入らなくなるポイントで狼それを利用して夏候惇から模擬刀を手放させたのだ。
「俺の勝ちだな」
「流石は狼様です！」
曹操達三人は唖然とし動けず、明命は喜びからか背中に飛び付き抱きついた。
初めに正気に戻ったのは曹操だった。

「信じられないわ、春蘭がこんなにもあっさり」
「わ、私が負けただと？嘘だ！もう一度戦え！」
「止せ姉者！」
　曹操はただ夏候惇があっさりと負けた事実に驚き、夏候惇は未だ認められず再戦を迫るが夏候淵が必死に　止めている。
「止めなさい春蘭、認めたくはないかもしれないけどこの勝負貴女の負けよ。」
「か、華琳さま、・・・申し訳ありません」
「いいのよ私の予想以上に姜維が強かった。ただそれだけよ。」
　勝負に不服をたてるが主である曹操に言われ夏候惇も流石に諦めた。
　曹操は予想以上に姜維が強かったことでより姜維が欲しくなったが約束を違えるのは己の理念に反する。だからこそ今は手を引く、そう今は、だ。覇王は欲したものは必ず手に入れる主義なのだから。
「残念ね、それだけの強さを持つ貴方が手に入れられないなんて」
「残念だったな。代わりと言ったらなんだが晩飯を作らせてもらえないか？」
「あら、貴方味が分かるだけじゃなくて料理もできたの？面白いは料理人には私から言っておくわ」
「まあ、楽しみにしてるといい明命手伝ってくれ」
「はい！頑張ります！」

　その日狼が作ったのは青椒肉絲に炒飯、回鍋肉に餡掛け焼きそば、〆に杏仁豆腐とゴマ団子である。
　曹操からの批判もなく、それどころか旨いとの評価だった。
　特にゴマ団子が気に入ったらしく作り方を聞かれたりもしたくらいだ。

狼のゴマ団子は揚げたあと表面きな粉をまぶしてあり、餡が胡麻餡の胡麻団子で甘過ぎず胡麻の風味を生かした一品だった。
「まさか貴方がこれ程の腕だったなんて、ますます惜しいわ」
「そこまで誉めてもらえるとは、光栄だな。」
曹操の誉め言葉に光栄だと返す狼。
料理を食べ終わり、曹操は狼と明命に泊まっていくように言い、狼達はそれを受けた。
今は明命と庭先で話している。
「明命、曹操をどう思った？」
「え～と、なんて言うんでしょうか？気圧される感じで、真面目な夏蓮さんと同じ感じがしました。」
狼の質問にそう返した明命、明命は曹操が発するその覇気を感じ取って自身の知る夏蓮と表現した。
今まで狼は明命の前で覇気を発したことがないため明命は狼の覇気を知らない。
「そうか、あれが王足りうる者が持つものだ。明命、夏蓮に曹操、いろんな領主を見てきた、気になる、支えたい領主がいたなら支えてもいいんだぞ？」
狼がそう言うのも明命のためになると自身で考えた結果だった。
将となれば色々な事が経験できる、兵の調練、兵の動かしかた、何が士気を高めるのか、下げるのかそれは自分といるだけでは経験出来ないことだ。
「私は狼様と一緒にいます！・・・・・・・・・ずっと」
最後の方でボソッと言った、ずっと、と言う言葉は狼には聞こえていなかった。
「そうか、ありがとうな明命」
内心明命が誰かに支えたいと言ったらどうしようかなどと不安があった狼はホッとし礼を言いながら明命の頭を撫でた。
「あら？こんな所で何してるのかしら？」
「なにを、さっきから見てただろ？」
ソコに曹操が現れ狼達に何をしているのかと訊ねたが狼は白々し

いとばかりに言いはなった。
「あら？知ってたの？つまらないわね」
「それで？なにか用があるんじゃないのか？」
「ええ、実は前々から目にかけていた娘が居るのだけれど、３年前程から頑なに支える事を拒まれているのよ。理由を聞けば支えたい人がいるからだ言うのよ。なにか知らないかしら？」
曹操がなにか用があるとふんだ狼が訪ねると曹操は話をした。
話を聞いた狼だが身に覚えがない。この世界では史実と違う事が多くある。故にわからない。
「まあいいわ、明日家に来る予定よ、旅に戻る前に会って見たらどう？」
「そうさせてもらうか、じゃあそろそろ寝るか、じゃあまた明日」
「ええ」
狼はそう言って宛がわれた部屋に向かった。思わぬ再会があるとは思わずに。

１５話

狼と明命は旅に出る準備をすませ曹操等にも挨拶をし今は屋敷の門の側の壁に寄りかかり、曹操が目にかけている人間が来るのを待っていた。
別にきちんと挨拶をする理由もないし、一目見れれば良かった。
曹操の誘いを断るほどだ自分が誘っても断られるだろうという判断からだ。
孫呉につく者か、それとも劉備か考えても答えはでない。

ふと一般人に紛れ強い気配を感じた。洗練されたという訳ではないがそれ相応の鍛練を行ってきたことは間違いない者だろう。
ふと狼はあることに気がついた、その者が発する気に覚えがあったからだ。
しかし、そこで疑問が生まれた。なんでだ?なんで曹操の誘いを断る?と、狼がそう思うのも無理はなかった。何故なら。
「まさか、愛理のことだったのかよ」
「なっ!?・誰ですか!わたしのま・な・・狼様!?」
おいおい、俺に様付けって、まさかそういうことなのか!?
曹操が目をつけていたが仕官を断られていたのは、かつて出会った司馬懿仲達、真名を交換した愛理だった。

今現在、狼と明命は街で一番寂れた茶屋にいる。狼達の他には幼さの残る男の子が一人だけだ。
曹操の屋敷で愛理と再会した狼は驚いた、愛理の方も驚いたこんなところで再会するとは思っても見なかったのだろう。
しかし曹操の屋敷で話をすると色々と面倒そうで茶屋で話をすることになったのだが、良い店に入り曹操と鉢合わせるのも嫌なので曹操が入らないであろう店を愛理が選んだのだ。店を選んだ愛理はと

言えば曹操と話をするので遅れていた。
店に着きお茶を頼みお茶を飲む、味は良かった、が、いかんせん店が古びていた。
それと明命の機嫌が悪い、愛理と会ってから機嫌が悪いのだ。
理由を聞いても話してもらえず、狼には何故機嫌が悪いのかわからなかった。
そこに話を終え走ってきたであろう愛理が入ってきた。
「お待たせして申し訳ありません狼様！」
「いや、別にそれほど待ってない、と言うかなんで愛理が俺を様付けで呼ぶんだよ」
「私は初めて狼様に会ったあの日から、狼様の目を見たあの日から狼様に支えようと決めていました。強さと優しさと覚悟をもったあの綺麗な目を見たときから」

真剣な表情でそう語る愛理をみて狼は嬉しく思った。
「掄里、そんなところにいないで貴方も此方に来たらどう？」
愛理は狼達の他にいた唯一の客に話しかけた。どうやら知り合いだったらしい、愛理が真名で呼んでいることからして優秀であろうことはわかった。
「は、はじめ、はじめまして！徐庶元直でひゅ！いはい噛んだった」
大丈夫だろうかこの徐庶元直は、というのが狼の第一印象だった。

話を聞けば徐庶は自分の幼馴染みである学友の諸葛亮と鳳統との実力の差を感じ、このままではいけないと思い私塾を飛び出し旅に出たらしい。そこで愛理と出会い一緒に旅をしてきたとのことだった。
何でも愛理が色々と話をしたらしく、なんだかとてもすごい人というイメージを持っており緊張していたらしい。その話を聞いた明命が愛理を狼のことをよくわかってる人と認識し真名を交換したよう

だ。機嫌もよくなり愛理と狼の話で盛り上がっている。
一方狼は烈に次いで第二の男の有名人に会えて嬉しく掵里と話をしていた。
「掵里は諸葛亮と鳳統程知がないかもしれないが二人より武に才があるんだろ？なら負けてないだろ。足りない物は他で補えばいいじゃないか。戦いながらまともに指揮をとれる軍師は貴重だぞ？」
「そうでしょうか？」
「自身の身を守れない戦場の上からしか指示をだせない、それは時として伝令の遅れにも繋がる。まあその逆もしかりだけどな」
狼の言葉を聞き掵里は考えている。
「まあなんにせよ早く街を出るぞ、曹操が来たら大変だからな」
「そうですね、急ぎましょう」
「はい！」
「ひゃわ！」
代金を支払って店を出る。
と、そこには未来の覇王様御一行が。
「あら、姜維まだ街にいたのね？それにしてもやっぱり貴方が司馬懿の言っていた者だったのね」
そう言いながらニヤリと笑う曹操、嫌な予感がするが流石に昨日の約束を反故にすることはないだろう。
「貴方を手にいれればおのずと司馬懿も手に入ると、ふふふ、楽しみが増えたわね」
ああやっぱり全然諦めてないよこの人、狙った獲物は逃がさないみたいなあれか？勘弁してくれよ。と狼は思った。
「貴方を認めるわ、今後私のことは華琳と呼びなさい」
「ん？いいのか？主従でもないのに」
ここで夏候惇が声をあげないのも気になる狼は夏候惇の方を見た。
「春蘭も秋蘭も貴方の事を認めているのよ」
「華琳さまが言われるからだからな勘違いするなよ、春蘭と呼べ！」
「姉者は照れているのだ気にしないでやってくれ私は秋蘭で構わない」

「じゃあ俺のことは狼で構わないからな」
そう言って真名を交換した狼達だった。

「じゃあ俺達はこれで、またな華琳、春蘭、秋蘭」
「ええ、私の配下になるまで元気でいなさい？」
「今度は負けないからな！覚えておけ！」
「狼程の者達が華琳さまに支えるならば何時でも歓迎する」
そう言って狼達、掄里も旅に着いてくことになり四人旅となった。

「狼様、明命から聞いた話では幽州を目指しているそうですが幽州に何かあるんですか？」
「いや、幽州に用がある訳じゃない、目的ついでに治安とか人を観るけどな」
「狼様、じゃあ何が目的なんですか？」
「気になります」

今後の方針について愛理が狼に聞く、狼が幽州に用があるわけではないとの言葉に明命と掄里も気になるようだ。
「南匈奴に行ってみようと思ってる」
「え、ええ～?!」
「匈奴に行って何をなされるつもりなのですか狼様？」
狼の答えに明命と掄里は驚きの声をあげた。対照的に愛理は冷静に目的を訊ねた。
「友達でも作ろうかとな」
そう言ってにっこり笑う狼、その笑みから目を逸らしながら愛理は考えた。狼が言う友達、その意味を。
「まあ、話し込んでいても進まない」
そう言って狼は歩きだし他の三人も後を追った。

１６話

狼達が旅を再開して１０日がたった。愛理が加わったことにより野宿をするとに抵抗が増した。
野宿の際に明命が狼にくっついて寝ようとしたのを引き剥がし言い争いをしたり、抗体を造るために毒のある食べていたのを怒られたりと色々あった。掵里の鍛練も始めたが気の才能は濃くなく苦戦中、だが弱音を吐かず頑張っているので大丈夫だと感じていた。
今は四人で焚き火を囲み川でとった魚を焼いていた、そこで狼が何かに気がついた。
「どうかされましたか狼様？」
「今なにか聞こえた。颯。」
愛理の言葉にそう返し何かが聞こえた方へ颯を向かわせる。
そして颯はすぐに戻ってきた。
「この森を抜けたところにある村が襲われてるみたいだ」
戻ってきた颯の報告では五十人程の賊が村を襲っているということだった。
「狼様！」
「愛理と掵里はこの場で待機、明命行くぞ！」
「「御意！」」「はい」

御意はやめてくれないかと頼んだ狼だが、その願いは叶わなかった。

狼と明命が村にたどり着くとすぐに賊をかりはじめた。

最低限の動きで迅速に、確実に仕留めていく狼達、そんな中狼の目に映ったのは一人の女の子が素手で賊に立ち向かっているところだった。その女の子の動きは荒々しく我流を思わせるものだったが振り上げたその足には気が溜まっていた。
「猛虎蹴撃!!」
放たれた気は賊を吹き飛ばした、が、女の子はその場で膝をつき倒れた。
恐らく気の枯渇、先の気弾がまだ扱えない技だったのか、多様すぎたのかはわからないが気を使いすぎてしまったことによる、本能的生命維持だろう。
その女の子に別の賊が近寄り捕らえようと手を伸ばした。
「よく頑張ったな」
そう言って狼は女の子抱き抱えた。
賊は突然現れた狼に動揺しながらも腰の剣を抜こうとしたがそれは叶わなかった。
「なっ!?俺の手が!!いたい!いだい~!!」
剣を抜こうと手を動かすと手が地に落ちたのだ。
狼は賊の横を通りすぎる際既に手を切り落としていた、賊は斬られたことに気がつかいていなかった、それほどまでに綺麗に迅速に斬ったのだ。
「うるせえ、永久に眠れ」
女の子抱き抱えた狼はそう言い放ち、脚を一閃した。
その脚からは気の斬撃が放たれ賊の首を撥ね飛ばした。ちょうどそこに明命がやって来た。
「狼様、侵入していた賊はその男で最後かと」
「わかった、明命は愛理と掄里を呼んできてくれ。俺は怪我人の治療を始める」
「御意です!」
元気に返事をし走り出す明命、狼は女の子を下ろし座らせた。
気の枯渇は狼が気を譲渡したことにより解決していた。
「危ないところをありがとうございました。私は楽進文謙といいま

す」
　楽進文謙、魏の五将の一人だ、それならば先の気弾を放てる実力にも納得がいった。
「いや、助けられて良かったよ俺は姜維伯約だ。怪我人の治療をしたい村の人を何処かに集めてくれないか？」
「はい！わかりました！中央の広場でお待ちください！」
　楽進はそう言って走りながら村人を集めに行った。
「これで大丈夫です」
「ありがとうございます、ありがとうございます！」
　怪我をした子の治療おえると母親から狼はお礼を言われた。
　ひどい怪我を負った人はいなかったが、死亡者が１０名いた。

「お疲れ様です狼様」
「愛理もな、見た限り復興には時間は掛からなさそうだし早めに出るぞ」
「御意です」
「もう行かれてしまうのですか？」
　狼と愛理の会話に楽進が残念そうな顔をしてそう言いながら近付いた。
「ああ、村長さんにも言ったが俺達に礼なら言葉だけで十分だ、他は村の復興に回してくれ」
　賊に襲われ被害を受けたのに礼としてもてなすくらいなら復興に役立ててほしいと言うのが狼のきもちだった。
「そう、ですか、わかりました」
　残念そうな顔をしながらも納得した楽進、だが。
「１つお願いがあります」
「俺にできることなら」
「一手お手合わせをお願いします」
　狼の放った気の斬撃をみて同じく気を使う者として戦ってみたいと思ったのだ。
「わかった」

そう言って狼は腰に差した刹那を愛理に渡す。
「有効打を与えた方の勝ち、それでいいな？」
「はい！」
返事と共に腰をおとし構えをとる楽進、それにたいして自然体で構える狼。
その構えは隙だらけであったが楽進は冷静に考えていた。あれだけの斬撃を放った狼がこのような構えをしているのはおかしい、故にこれは誘いだと。だがそう考えるとどう攻めるか悩んでしまった。
仕掛けてこない楽進をみて狼は内心感心していた。
隙だらけの構えをとれば大抵の者は馬鹿にされたと感じ怒り仕掛けてくるものが大半だ。だが楽進はそれが誘いであると看破し攻め手を考えいることに感心し流石は楽進と思っていた。
「さて何時までも睨み合っててても仕方ない、来ないならこちらからいくぞ？」
先に仕掛けたのは狼だった、右足での上段蹴りそれをしゃがんで避ける、が、狼は蹴りの勢いを生かし体を捻り回転し左踵落としを放つ、楽進はそれを転がりながら回避した。
「反撃しないならどんどんいくぞ？」
回避した楽進にそう言いながら脚から気弾を放つ狼。
「くっ！」
楽進は苦しい声をあげながらも避けるが狼の追撃は続く。
このままではいけないと楽進は気弾を狼の足元に放った。
「ん？煙幕か」
足元に放った気弾により起こった砂ぼこりを煙幕に使用し体勢を立て直した楽進は狼に接近し蹴りを放つが、避けられた。だがここで攻めを止めてはまた追い込まれてしまうのは必至、ならばこのまま攻めるしかないと蹴りや拳を放つが尽くか避けられてしまった。
狼は楽進の攻撃をかわしながら見極めていた、攻撃は単調だか的確に狙って放たれているものだと思った。
「なかなか楽しめた、これはその礼だその身で受けてものにしてみせろ」

そう言い放ち楽進の左手拳を右手で流し無防備な横腹に左拳を添えた。
次の瞬間楽進は膝を着いた、何が起きたのか理解できなかった楽進、添えられた左拳から発せられた何かが自身の中で広がりその衝撃から膝をついてしまった。
「今のは、一体？」
「なに、簡単なことだ左手に纏わせた氣を流し込んだんだ。その時に氣を振動させ体を内部から攻撃した。弱めに打ったから直ぐに立てるだろ？」
狼の言葉をききながら思ったこの人に教われば私は強くなれる、だが村のみんなを、出掛けている親友を放って付いて行く訳にはいかなかった。
「ありがとうございました」
「こちらこそ楽しかったよ」
そう言って握手をかわす二人がそこにいた。

17話

楽進と別れてから1年たち遂に狼達は南匈奴の地を踏んでいた。
狼の目的はこの地を治める王、禅于と親しい仲になることにあった。窮地の際助けに来てもらえる相手が欲しかったのだ。匈奴の民は遊牧しながら暮らしているため馬術にも長けている。
機動力は間違いないし誰も匈奴と手を組んでいるなど想像しないからだ。
「さて、禅于はどこにいるのかね～」
「狼様、もう少し緊張感を持ってください」
「そうです！ここはもう匈奴の土地なんですよ！」
狼の言葉に冷静に掄里は怒りながら返した。
敵地であるのに緊張感が無さすぎると。
「だけどな愛理、掄里、俺達は仲良くなるために来たわけで争うために来た訳じゃないんだぞ？」
「しかし、話が通じる相手とはかぎりません、万が一にも襲われたりしたら」
「その時は諦て帰るさ、邪魔するなら痛い目見てもらうかもしれないけどな」
心配そうな愛理落ち着かせるように狼は答えた。
明命と颯はこの場におらず少し偵察に出てもらっていた、基礎鍛練を欠かさずこなしてきた狼達、明命の偵察に関しての技量は相当高いものになっていた。
「ですが…」
「愛理も掄里も自分達がどれくらい強くなったか実感がわかないかもしれないが、そこら辺の賊なら束になって掛かってきても問題ない、俺と明命は言わずとも判るだろ？」
「はぁ～、わかりました。」
「あ、愛理ひゃん！いいんでひゅか?!」
「掄里、確かに私達は強くなってるわ、私も早々おくれをとるつもりもないし。何より私達の手に負えない相手だったとしたら、狼様が助け

てくれる、そうですよね狼様？」
「当たり前だ」
狼は少し赤くなりながらたずねてきた愛理なそうかえした。

「只今戻りました狼様！」
暫くして明命が戻ってきた。報告を聞いたがそれらしい集団は見受けられなかったらしい。となると後は颯次第。
「ピュイピュイ！」
疾風が戻ってきた、その話によれば四日ほど歩いた距離に大きな集団を発見したらしい。
恐らくその集団がそうだと判断した狼達はその集団を目指すことにした。

「明命？なぜあなたは狼様にくっついているのですか？その辺り納得いく説明を要求します」
集団を目指し移動する狼達、その最中明命は狼の右腕にくっついて移動中だ。
愛理はそれが気に入らず真意を問いただした。
「偵察のために狼様から離れていた分を今取り戻しているのです！」
「そんな言い分が通るわけがないでしょう、離れなさい。」
「嫌です」
「離れなｓ」
「嫌です」

「はｎ」
「嫌です」
「……」
断り続ける明命にしびれをきらした愛理が鋼糸を着けた手袋取りだし両手にはめた。
その愛理の放つオーラに掄里は涙目になっている。
「愛理、俺まで巻き込まれそうな気がしてならないんだが気のせいか？」
「問題ありません、私ではまだ狼様の硬気功を破ることはできませんので」
さらりと狼の疑問に返した愛理だが巻き込まれるのは確実なようだと狼は確信した。
狼は小さくため息を吐き、愛理に左手を伸ばした。
「……どうされたのですか狼様？」
「あまり怒ってやるな、それに余り仲間内での喧嘩は好ましくない。だから皆で手を繋いでいくぞ」
「……」
「嫌だったか？」
黙り混んだ愛理を見て少し不安そうに狼は愛理に聞いた。
「い、いえ！そのようなことはありません!!」

少し焦りながらも差し出された手を握る愛理。
それを見て頬を膨らませる明命。
そんな明命の様子に首をかしげた狼。
そんな三人を見て掄里はため息をついたのだった。

18話

狼達がその集団を目指し移動を始めてから一週間が経過していた。しかし、その集団とはいまだ遭遇できずにいた。何度か颯に確認してもらったがその集団がいたであろう場所には誰もいなった。
「……おかしいですね」
「……確かにな」
この事態に狼達は疑問を抱いた。こんなに早い間隔で移動を繰り返す理由は何なのか。
確かに早い間隔で移動をする習慣がある可能性もあるが、これまで見てきた場を見るに慌てて移動を始めたように感じられた。
「……まさか颯か？」
「どういうことですか狼様？」
暫く考えて狼はある可能性に気がつき肩に停まる颯を見た。
掵里はその理由をたずねた。
「颯は針尾雨燕と言われる種類の燕なんだけどな、一部の地域ではその容姿から悪魔の鳥と呼ぶ所もあるらしい」
「……なるほど、匈奴ではそれを凶事の予兆としていると言うことですか？」
「あくまで可能性の話だがあり得る話だろ？」
「確かにそうですね。では今度は明命に？」
「……いや、俺が行く」
「「駄目です（ピューイ）!!」」
理由を話し明命に探らせず自分が行くと言った狼だったが瞬時に三人と一羽に却下された。
「何でだ？」
「狼様が偵察で済ます訳がありません！」
「そうです！以前にだってそんなことがありました！」
「なので却下なのです！」
「ピュピューイ！ピュイ!!」
これまで旅して来たなかで賊討伐の際、狼が偵察に向かい自分一人

で問題ないなと判断し、そのまま賊を全滅させたことがあったのだ。
その際に他の三人と一羽にお叱りを受けたことがあったのだ。三人と一羽も狼の実力を知ってはいるものの心配だったのだ。
「……仕方ないじゃあ明命任せた。」
「御意！」
狼の命を受けて明命は直ぐ様駆け出していった。
「さて明命が帰ってくるのを待つだけじゃあれだし、俺達も少し進むか」
「そうですね、その方が宜しいかと」
「じゃあ行くぞ」
「「御意！」」
残った面々もまた移動を始めたのだった。

明命が集団を発見したのは狼たちと別れてから半日ほどたった頃だった。
「恐らくあの集団で間違いありません」
意外に早く見つかったと明命は笑みを浮かべた。
そして発見した場所を報告すべく来た道を引き返そうとしたとき、殺気を感じ横に跳んだ。
明命が跳んだすぐあとに明命がいた場所には矢が二本刺さった。
「何者だお前」
矢が放たれたであろう方向には一人の青年が立っていた。
「只の旅人です」

「只の旅人じゃあ今の矢は避けられねーよ、それに言ったよな「あの集団で間違いありません」って家の家族たちに何の用だよ、場合によっては容赦しねぇぞ？」
「……」
明命は悩んでいた、ここで勝手に狼の目的を話していいものかと。
「黙りかよ、なら！」
青年は腰にさした剣に手をかけ構える。
「ま、待ってください！私が旅をしているのは本当です！ただ、私が支え共に旅をしている方が貴方達の王に会い話がしたいと私に捜索を命じ探していたのです！」
「俺と話だって？」
明命は此処で戦闘を行っては友好を結ぶことが難しくなると判断し素直に目的を話した。
しかし青年の答えを聞き疑問を抱いた。
「俺と？もしかして貴方が」
「いかにも俺が禅于だ。見たところお前結構強そうだな。お前の主も強いのか？」
「はい、私などまだまだ及びません！」
明命の答えを聞くと青年は嬉しそうに笑った。
「クックックッ、そうかよ、いいね～実にいい。いいぜお前の主を呼んできな会ってやるよ」

明命はそれを聞き軽く会釈をして来た道を駆け青年は出した。
「あの速さでまだまだ及ばないってことはどんだけ強いだアイツの主様は？あ～、凶事だと思って避けてたが久しぶりにいい緊張感が味わえそうだぜ！」

明命が去っていくのを眺めながら嬉々として笑っていた。

１９話

明命が帰ってきた報告を聞く限り禅于は戦闘狂だったようだ。戦闘狂が求めるはじゃは強者との戦いおけるスリル、もしくは死の恐怖を感じたいと言ったものがほとんどである。

「何はともあれ、よくやってくれた明命」

「はい！」

「ですが狼様」

「解ってるさ愛理、戦闘は避けられないだろうし、相手は殺すつもりで来るだろうさ」

「けど。こちらはそうはいかない、そうですね狼様」

掄里の言うとおり友好関係を築きに来た此方は殺す訳にもいかず、更に相手に納得させるだけの内容の戦いをしなくてはいけなかった。

「相手を待たせるわけにもいかないし行くとするか」

どうやってこの場を切り抜けるかを考えながら狼は歩を進め始めた。

「よく来たな。目隠ししてるお前がそいつの言ってた主か？」

「ああ、初めまして南匈奴の王禅于殿、俺は姜維伯約、今回の目通りｋ」

感謝すると続けようとしたがそれは叶わなかった。

何故なら禅于が斬りかかってきたからだ。

「今のを避けるか期待通りだ」

「熱烈な歓迎だな。これは敬意もいらんか」

今の狼は刹那を持っていない、愛理に預けたからだ。

刀での斬り合いになれば峰打ちしか相手を切らず満足させるのさ難しいと判断した狼は、無手での戦闘を選択したのだ。

「俺と無手でやろうってのか？」

相手は狼が無手であることにやはり不満を抱いた。

だがそれも一瞬だった。

「無手だったら俺が弱いとでも？」

その言葉は決して強いものではなかった、が、その言葉に乗せられた殺気は禅于が今までに感じたことのないほどの殺気だった。
「ふ、ふはははは、良いね！実に良い！この死を直感出来るような殺気！俺はなぁ！生きている実感が欲しいんだよ!!だらだら生きていてなんの意味がある!!」
「そうかい、なあ、賭けをしないか？」
「あぁん？賭けだと？」
狼の言葉に焦れったくも禅于は返事を返した。
「勝った方の願いを負けた方が聞くただそれだけだ」
「勝者に敗者が従うのは当然だろう、がぁ!!」
待ちきれないと言わんばかりに禅于は再び狼に斬りかかる。
禅于の刃をギリギリまで引き付け左足を一歩引いて避けると同時に狼は右拳を顔目掛けて放つ、が、禅于はそれを屈んでかわした。
次に禅于が狼の足を狙い剣を薙ぐが狼は跳んでかわしそのまま空中で回転、禅于目掛けて踵落としを放つが、禅于は横に転がるように回避した。
そして禅于がいた場所は狼の踵落としにり2メートル範囲ほど陥没いていた。
「おうおう、こえぁなぁーおい。」
「軽々避けといてそれはないだろ」
両者共に様子見だと言うことはわかっていた。
禅于は思った。長くこの時間を楽しみたいが、死ぬつもりはない、だが実力的に長期戦は不利だと、ならば答えは簡単だ、短期決戦でより濃い時間を楽しもうと。
「お前相手に余裕なんざみせられそうにないんでな！悪いが全力で行くぜ！」
そう言い終わると禅于は右手に剣を持ち両手を下げたまま軽くその場で跳んだ、そして着地した時その場にいる者の目から消えた。
次に現れたときには既に狼の首元に刃を振り抜いていた。
「「狼様!!」」
愛理、明命、掄里は叫んだ。自身たちもそれなりの武を持っている

と思っていたが、禅于の動きに着いていけなかったからだ。
しかし、刃を振り抜いていた禅于はあるべき筈のものを感じとれず、困惑していた。
『おい、なんでだ？確かに俺はこいつを斬った、斬ったはずだ！一歩も反応できちゃいなかった！ならなんで！』
「斬った感触がないんだってか？」
「ぐっ!?」
狼からの言葉でなんとか我にかえり、咄嗟に剣を盾にした、しかし狼の放った回し蹴りは先程の踵落としの非ではない破壊力を発揮し剣を折り禅于を吹き飛ばした。
「愛理達も心配しすぎたぞ、まったく。」
ふう、とため息をつきながら愛理達の方へと体を向けた。
「で、ですが」
「そ、そうです」
「禅于さんが消えて」
「ん、そう言うことか。俺にははっきり視えてたぞ？」
この場においてただ一人狼だけが禅于の動きを捕らえていた。
「がぁぁぁ!!」
吹き飛ばされた禅于が自身の体に渇をいられるように
叫びながら立ち上がった。
「はぁ、はぁ、てめぇ、俺の動きをが視えてたのか？
そんな目隠しをして！どうやって避けた！」
「ああ、視えてたさ、お前の中に……いや、お前の持つその剣から何かが流れ込んでいくのもな。どう避けたかは秘密だ、その方が楽しいだろ？」
「!!」
禅于は驚きを隠せなかった、自身の持つ剣、緑猿（リョクエン）は代々禅于が受け継いできた剣で、逆に言えば緑猿を扱えぬ者に禅于の資格はないと言えた。
緑猿は初代禅于の魂が宿るとされ強き匈奴の者に反応し、その体に初代の力を降ろすことができたのだ。

「さてまだやるか禅于？」
狼はスッと腰を少し落とし構えた。
「……ふ、ふはははは!!当然だろうが！こんな楽しい事、こんな簡単に終わらせてたまるかよ!!」
禅于は歓喜していた、この力を手にしてから自分の周りには自分と競える者どころか立ち向かってくる奴さえいなかった。だが今目の前に全力で挑んでも勝てないであろうやつがいる。
『こんなに嬉しいことはない。お前の強さを俺に見せてくれ、そして、俺の！』

「く、はぁ、はぁ……俺の負け、か」
「そうだな」
ドサリと仰向けで禅于が倒れた。
２人の闘いは４半刻ほど続いたが狼に傷らしい傷はなく対照的に禅于はボロボロだった。
が、禅于はニヤリと笑い右手に掴んだ物を見ながら言った。
「だけど、一矢報いたぜ」
その右手には狼眼を隠す布が握られていた。
「さて、殺るなら殺りな、だが他のやつらには手を出さないでくれると助かる。」
「「「「禅于様!!!!」」」」
そんなことをするつもりは狼には無かったが、禅于の言葉を聞いてきた回りの一族の者達が禅于に駆け寄った。
「禅于様を速く安全な所まで避難させろ！」
「その間の時間は我らが稼ぐ！」
「お、お前ら!?勝手な真似すんじゃねぇ！俺に約束を違えさせるつもりか！」
「なりません！例え約束を違えてでも貴方は生きなければならないのです!!」
「次なる王を育てるのは貴方の使命！」
「それが我ら一族の王の務めです!!」

「そんな簡単に命を投げたさせたりはさせませんぞ！」
「今この一族を纏められるのは禅于貴方だけなのです！」
禅于に対し大声で言い返す一族の者達、しかしそれでもやはり狼は彼等達は禅于のことを大切に思っているのだと思えた。

「悪いが、少し話を聞いてｋ……!?伏せろ!!」
落ち着いてもらおうと狼が話しかけた時、狼はあるものに気がついた少し離れた丘の上に弓を構えた者達がいたのだ。数は２０人程だが既に弓からやが放たれた。
「焔舞！」
狼は禅于らの前にでて、氣を焔へと変換し纏いその場で舞う、そして、少しながらの上昇気流を作り出した。それにより矢の軌道がそれ禅于らの後方へ突き刺さった。
「お前なんで？」
「話はあれを片付けた後にしないか？」
狼がスッと指差した方、そこには武装した１００程の匈奴の兵士がいた。

２０話

現れた１００の兵士達の奥から一人の男が前に出てきた。並みならぬ巨体2メートルに届きそうな男だった。
「伯父貴！何のつもりだ！」
禅于がその男に向けて叫んだ。
「伯父？」
狼は禅于の方へ顔を向ける。それに禅于は頷いた。
「アイツは俺の伯父貴、先代禅于を決める際に選ばれず俺の親父が禅于になって以来、相談役になってくれてたんだが、まさかここに来て」
「無様だのう禅于、いや陸縁よ！災いを招き入れた挙げ句、そのざまでは王が勤まるわけもなかろう！ここは1つワシが代わりに王として立ち一族を守ってやらねばならんだろう！」

禅于の伯父はニヤニヤと笑いながら言った。
禅于の伯父の言葉を聞き狼は理解した。
『なるほどな。薄汚い野心を持った伯父が禅于が負けたのを良いことにここでまとめて葬り、自分が王になろうとそう言うことか』

「禅于、今戦えるのはここにいる連中だけか？」
「ああ、少し離れた方で怪しい集団がいたってんで、そっちに人を回しちまってる。それに元々俺達は少数で移動しながらの生活をしてるからな、だがあの程度の数なら心配ねえ」
しかし、そうは言ったものの禅于は疲労感を隠しきれていない。
しかも禅于側は２０あまりの戦力、1人あたり5人計算と言えば希望が見えるが乱戦になれば厳しいだろう、そしてなにより……
「左の丘の向こう側に２０人ばかり隠れてる、奇襲隊ってところだろうな。」
「……マジか、伯父貴のやつ本気も本気みてぇだな」
目撃者を殺し、遠方の者たちには狼が禅于を殺し、それを自分が殺したとでも言うつもりなのだろ。

「さて、長々と話をするつもりもないのでな、お別れじゃ。行け！1人として生かしておくなぁぁ!!」
禅于の伯父の掛け声により１００の兵がこちらに向かい突撃を始めた。
狼はそれを見て3人に指示を出す。
「愛理、刹那を」
「こちらに」
「ありがと、流石だな。さてと、愛理！明命！」
「「はい！」」
「2人は左の丘の向こう側にいる、奇襲隊とおぼしき奴等の殲滅、終わり次第戦線に戻れ。だがもし万が一、非戦闘員だった場合安全の確保、愛理が護衛し明命は戦線に戻れ」
「「御意！」」
返事を返し直ぐに2人は動き出す。
「掄里！」
「は、はいぃぃ！」
「気を張るな、落ち着いてやればいい、掄里は禅于に治癒功をかけてやってくれ、禅于が戻るだけで士気が違う」
「は～、ふ～、……御意です！」
深呼吸をしたあと掄里は力強く返事をした。
「さてと、始めようか」
狼が刹那を抜き鞘を腰に指す。
「お、お前ら!?これは俺らの問題だ！手ぇ出すな！」
「喧しい、敗者は勝者に従え、だろ？治るまで大人しくしてろ。禅于が治るまでの間2人を守ってやってくれ、頼む。」
禅于を言葉を切り捨て回りにいた兵達に狼は頼んだ。
「確かに任された！」
「「だが我々も」」
「「「共に戦うぞ!!」」」
２０人の内5人が前に出てきた。風格、闘気、間違いなくこの中のトップ5だろう。

「そう、か、死ぬなよ？あんたらが死んだら禅于が悲しむ」
「お前こそな！」
「後で酒でも飲もうじゃねぇか！」
「「呑気なこと言ってないでいくぞ！」」

そして6人は駆け出した。

「弱いな、だがこれは」
戦いはすぐさま乱戦になった。
離れすぎず行動することにより互いが互いを助け合い戦いを続けていた狼達、だが数の暴力に立ち向かうのは難しく各自傷を負っていった。
狼とて例外とは言えず他者を気にしながらの戦いは余計に気を使い、神経をすり減らしていた。
「ちぃ、後ろだ！」
舌打ちをしながら背後に敵がせまることを知らせる。
「ぬぅ!?くぅ、おらぁ！」
「大丈夫か？」
疲労からか反応が遅れ刃が掠めたものの、敵を斬った禅于の兵に狼は近寄り声をかける。
「こんなもん傷のうちに入らねぇよ」
そう言った兵だが疲労感が酷くこのままではボロが出るのは時間の問題だと狼は思った。
ベストは禅于の伯父を斬り、相手を戦意喪失させることだろう。だがそれではこの5人を確実に見捨てることになるのは明らかで、狼は

悩んでいた。
「なあ」
「どうした？」
　いつのまにやら5人は背中合わせに集まっていた。
「お前なら、擂刃様、いや擂刃の所までいけるんじゃないのか？」
「行けると思う、たがそれは」
「本当は自分で取っ捕まえて！」
「禅于様の前に突きだしたい！」
「だが、俺らじゃできないようだ」
「頼む！」
「アイツだけは許せんのだ！」
　顔を合わせてはいないが本気なのはわかった。
　例え自身らが死ぬことになろうとも。
　狼はフッと口の端をあげた。
「わかった」
「すまん」
「だが死ぬなよ？」
「わかっている！」
「そう言うことだ、頼んだぞ！明命！愛理！」
　そう言うと共に狼は走り出す、そして入れ替わるように明命と愛理が到着した。
「任せてください！」
「御意。さて、身のほどを教えてあげます。かかっておいでなさい反逆者ども！」

「ふん、小僧が邪魔しおってからに」
「悪いなあんたの好き勝手させるわけにはいかないんでな、何よりあんたは王の器じゃない」

「ほざけ！」
ガァァァァァン!!
擂刃が狼にめがけ戦斧を降り下ろした。
それを狼はバックステップでかわす。
「力だけはあるみたいだな」
「ふはは！貴様など我が戦斧の餌食じゃ！」
大声で笑いながら戦斧を再び肩に担ぐ。
「だが、あんたに構ってる暇はない。終わらせてもらうぞ！」
「ぬかせ！」
狼は擂刃に接近、擂刃は狼目掛けて戦斧を振るった。それを狼は避けもせず右足を踏み込み愛刀、刹那を抜刀、戦斧の刃に滑らすように合わせ、斬った。
「な!?」
擂刃は信じられないと言った顔だった。自身の自慢の肉体が産み出す破壊力を乗せた戦斧が棒の用にか細い剣に破壊、ましてや斬られるなど想像すらしていなかったからだ。
「死ね」
しかし狼にとってそんなことはどうでもいいことだった。振り抜いた刀の勢いそのままに一回転し、擂刃を
左肩から斜めに切り捨てた。
「ば、ばか、な……」
擂刃は前のめりに倒れ、それ以降動くことはなかった。
「貴様らの偽王は死んだ！貴様らの敗けだ!!」
戦場に狼の声が響き、擂刃の兵達は動揺した。
「てめぇら覚悟はできてるな？」
「ひっ！」
掵里の治療により回復した禅于が右に折れた剣を左に新しい剣を持ち擂刃の兵に歩み寄る。
「さあ、死か服従か好きな方選べ!!!」
この瞬間、狼達の勝利が確定した。

21話

「「はははははは!!!」」
今の現状を一言で示すなら宴会である。
狼達は擂刃の一味を倒した。
そして、その夜感謝と歓迎の宴へと招かれたのだ。辺りでは酒を飲み、飯をくらい、どんちゃん騒ぎが繰り広げられていた。先程まで愛理らも近くにいたが女子供に引っ張られ別の場所で話をしている。
「よう、楽しんでるか?」
「ああ、楽しませてもらってる」
1人になった狼に禅于が話しかけた。
「しかし、まあ、あれだ、改めて助かった」
「気にするな、もともと俺は禅于と友好を結びにきたんだ、その相手に死なれちゃ意味がない。」
「だが、お前らの助けがあったからこそ1人として死なずにすんだ。」
そう言って禅于は頭を下げた。
禅于が言った通り怪我人は出たものの死者は出てなかった。
「アイツは、円陣は大丈夫か?」
円陣とは禅于の守りをしていた兵の1人で、不意を突かれ左腕を失っていた。
「ああ、お前の治癒功?だったか?あれのおかげで傷は閉じたし安静にしてりゃ問題ねぇ、俺の家族はやわじゃないからな。」
そう言いながら酒を飲む禅于、だがその表情からはやはり心配しているのだと狼は気づいていた。
「それにしても、まさか俺と友好を結ぶためだけに、来たって聞いたときは驚いたぜ」
「そんなことないだろう?互いに志が理解できて、利が有れば協力関係になれるだろ。今の国じゃあ匈奴と仲良くするなんて考えるやつがいないのは確かだろうけどな。だからこそ、誰も俺と匈奴と友好関係だなんて考え付かないだろう?」
「そうかもな。」

二人は揃ってニヤリと笑った。
「そういや何時までもお前って呼ぶのもあれだな。呼びあってたのは真名だよな？」
「ああ。んん、では改めて、姓は姜、名は維、字は伯約、真名は狼だ。」
「そうだな、俺は南匈奴の王禪于、本来の名は呼廚泉、真名陸縁だ。」
二人は改めて名乗り真名を交わした。
「これからどうするつもりなんだ？」
「国に戻って同士を探して、義勇軍から始めようと思ってる。名家の生まれでもない俺が出来るとしたらそこからだ。」
「まあ、確かにそうだな。お、そうだ、誰か羌？知らねえか？ちょっくら呼んでくれ！」
「分かりやした！」
狼の話を聞き陸縁は誰かを呼んでくるように指示をだした。
「どうかしたのか陸縁？」
「ああ、流れ者で訳あって今度そっちに行こうとしてるやつがいるんだわ、それなら一緒にどうかってな。」

「なんだ？」

少しして現れた何処かの民族衣装を着た人物が1人現れた。
背丈は明命より少し高い程度、髪は長く整った顔立ちをした女の子だった。
「おう、お前今度あっちに行くんだろ？なら暫く狼達と一緒に行ったらどうだ？」
「……」
女の子は答えず思考しているようだった、自身にもたらされる利を考えているのだろう。
「狼、それに他の奴等も腕は確かだ間違っても邪魔にはなんねぇだろ」
「……そうだな、頼めるか？」
「君の目的が何かは解らないが、まあよろしくな。俺達が信頼できると思ったら話してくれ、できることであれば協力する。」

「ああ」
女の子は暫く考えた後で同行を願い出た。そして狼はそれを了承し握手を求めたが女の子は静かに返事を返すだけだった。
「ふう、まだ信用に値しないか、せめて名は教えてくれないか？知ってるかもしれないが、俺は姜維伯約だ。」
「羌？」
女の子は静かに一言だけ自身の名を名乗った。

一夜明け、狼達は旅支度を整え出発しようとしていた。
「昨日は楽しかった、ありがとうな陸縁」
「よせよせ、こちとら助けられ身だ。それはそうと皆が起きるまで待たないのか？」
「ああ、せっかく気持ち良さそうに寝てるんだ寝かせておけばいい」
昨日の宴会で陸縁以外は未だに夢のなかであった。それを起こすのも気がひけると言うこともあり、狼達は出発することを決めた。
「羌？、目的ちゃんと果たせよ」
「当たり前だ」
陸縁は羌？と話をしている。その様子を見て愛理は狼に話しかけた。
「狼様、本当に宜しかったのですか？」
「羌？のことか？大丈夫だろ、羌？の目的はいまだ定かじゃないのは確かだが、俺達に害するものじゃない。それに恐らくだが、陸縁の頼みでもある筈だからな。」
「頼み、ですか？」
「ああ」

狼は羌?の目的が何かある程度見当をつけていた。そしてそれをできることならば、手助けしてほしいと言う陸縁の心内を察していた。
「明命、掵里は大丈夫か?」
「はい!もうしっかり起きました!」
「……すみましぇんでした」
昨日、酒を飲まされ酔ってしまい、朝寝ぼけていた掵里は、申し訳なさそうに謝った。
「気にするな、向こうも終わったみたいだし行くとするか」
そう言って陸縁と羌?の方を見ると話を終えたのか羌?が此方に歩き出していた。
「話はもうよかったのかい?」
「ああ、待たせた」
羌?の態度は相変わらずであった。
「またな!狼!次会うときまでにはお前に勝てるくらい強くなってるからな!!」
「ああ!楽しみにしてるぞ!!」
狼と陸縁は互いに拳を握り上にあげた。そして互いに目指すものに向けて歩き出した。

22話

陸縁と別れから3ヶ月、狼達は天水を目指し旅を続け今は雍州にいた。

その間羌?とは少しづつコミュニケーションをとり、口調は変わらないものの、当初に比べ話すようになっていた。羌?は武もさることながら知も持ち合わせ、賊を討伐する際その腕を発揮した。

羌?は真名を持っていなかった、そう言った風習がない一族だったらしく狼達から真名を受ける事を拒んだのだが、認めた相手なら問題ないと狼達が言ったため、今では狼達四人は真名で呼ぶようになっている。

「狼」

「なんだ?羌?」

狼に羌?が話しかけた。とはいっても二人は今手合わせの真っ最中である。

「3ヶ月の間、私は狼達を見定めてきた。」

「そうか。それで?俺達は羌?のおめがねにかかったのか、な!」

「……」

狼は話をしながらも気を間嫌わせることなく羌?に鋭い一振り羌?に放ち、羌?も予想していたのか後方へ引き二人に距離ができる。

「ああ、禅于を負かしたことから判っていたが、武に秀で知を持ち、何より他者に優しい。」

襲われた村等で怪我人を治したり、賊を討伐したりといったことからの羌?の判断であった。

「そして真名を持たぬ私に真名を預けた。」

「半ば強引だったがな」

二人は構えをとる。狼は居合いの構えを、羌?は独特の構えを。

「だからこそ」

そう言って動いたの羌?、羌?はスピードタイプその動きは明命に並ぶだろう。

背後に回りながら一閃、しかし、狼は素早く反転し刹那を抜刀し羌

?の持つ剣を巻き込むように絡め弾き飛ばした。
「私の目的を話す」
そう言った羌?の手には剣が握られておらず離れた場所に突き刺さっていた。

山中で見つけた小屋を宿がわりにして5人は卓を囲み食事を済ませ終わったあと、羌?は自身のこれまでと目的について話始めた。

※羌?のことはキングダムを読んでください。

「「「「……」」」」
羌?の話が終わった。
その壮絶な過去を知り、羌?の目的、覚悟を聞き沈黙した。羌?も黙ったままだった。

狼は羌?の復讐に手を貸すことに反対ではなかった。だが復讐を終えたとき、生きる意味を無くしてしまうのではないかと心配していた。
愛理は羌?の復讐に手を貸した時にもたらされるメリットとデメリットについてを考えていた。
明命は自分とは違うものの家族を失ったもの同士思うところがあった。
掵里は祭を想像し、想像しすぎた結果顔が蒼白くなっており俯いたままだ。
羌?はこのまま行動を共にするべきではないのではないかと思っ

ていた。この3ヶ月の間で、只ひたすらに復讐だけを目指し生きていた中で忘れかけた楽しいという感情が呼び起こされていた。だがこのまま行動を共にしてしまえば復讐心が薄れてしまうのではないかと不安になったのだ。

そんな中沈黙を破ったのは狼だった。

「羌?俺は復讐をとめるつもりはない、出来ることなら俺は手伝ってやるつもりだ。だが復讐を終えたあとはどうするつもりなんだ?」

「……」

狼の質問に対して羌?は口を開かなかった。

正確には答えることができなかった。復讐を終えたあと?復讐だけを考えてきた羌?にとってそんなことは考えてもいなかったからだ。

「前にも言ったことだが、この国は時機に崩れる。そして帝になるべく幾人かの人物が王となり国を作り、他国を滅ぼす戦いが始まる。その時、俺も1人の王として戦いに身を投じるつもりだ。もし、羌?さえよければ復讐を終えてからで構わない、共に戦ってはもらえないか?」

「……」

「勿論すぐに答えを出さなくてもいい。復讐を終えた時でも構わない。」

「わかった」

狼の提案に羌?は頷いき、話しは終了した。

次の日、狼達は天水付近までやって来ていた。

此れから義勇軍を組織するにしても齢１５程の小僧の言葉に誰が耳を傾けるか、ましてや国が滅ぶなど言えば反逆者扱いで極刑だろう。

「狼様、天水には里帰り、と言うわけではないのですね」

愛理は狼に訊ねる。天水に行くとは聞いていたものの、その目的を聞いていなかったからだ。

「当然だな。暫く天水を拠点にし動くつもりだ。」

狼は自身のいた街を拠点とし兵を集め、同時に各勢力の情報と羌?の姉の仇の情報を集めていこうと考えていた。

「狼様の育ったところですか、楽しみです！」

「き、緊張してきまひた！」

「落ち着きなさい明命、掄里は深呼吸。」

明命は狼の故郷に行くと知ってからウキウキで跳ねている。掄里は狼を育てた母親に会うと知ってからドキドキで緊張していた。

その二人に愛理が深呼吸を促し二人揃って深呼吸をしていた。

その光景に狼は笑みを浮かべた。

「狼」

「羌??」

不意に羌?に呼ばれ狼は羌?の方を向く。

すると羌?は前方を指差した。

「煙だ」

「!!」

羌?が発した言葉に驚き直ぐ様羌?の指差す方向を見ると天水の方角から煙が上がっていた。

「狼様！」

「先に行く！何があるかわからない、明命、愛理、掄里は離れないような速度で来てくれ！すまん羌?来てくれ！」

「「御意！」」「わかった」

そして各自走り出した。
「頼むから無事で居てくれお袋！」
狼はそう言いながら天水へと急いだのだった。

２３話

天水へとたどり着いた狼達が見たものは荒れ果てた天水だった。
「……何だよこれは」
「……狼」
狼は目の前の光景が信じられなかった。
天水は小さい街ながら自衛団をつくり、その練度はそこそこのものであった。それ故にそこいらの賊風情が相手になるとは思えなかったからだ。
「今、賊に襲われている訳じゃ無さそうだな」
「……だな、時間はたっていなさそうだが」
二人は辺りを見渡したが、賊の姿が見えなかった。しかし、数件の家屋から火の手が上がっていた。
「ピューイ!」
上空を飛ぶ颯が声を発した。
「中心部の広場に人が集まってるらしい。」
「わかった」
二人は急ぎ中心部にある広場へと向かった。

中心部の広場には１００人程の人が集まっていた。
怪我の手当て等を行っていた。

「誰だ!」
狼と羌?に気がついた一人が声をあげた。
「俺は「狼!!」!」
狼が名乗ろうとしたとき人を掻き分けながら狼の名を呼び１人の女性が前に出てきた。そして狼へと駆け寄り抱きついた。
「大きくなったわね狼」
「お袋、無事でよかった」
狼に抱きついたのは他でもない、母、水仙だった。

それを見ていた回りの人達が騒ぎだした。
「姜華さんとこの息子って」
「ああ！姜維だ！」
「麒麟児が帰ってきたぞ！」
水仙が抱きつき名を呼んだことから狼が誰だかわかったようだ。再会も程ほどに狼が水仙に聞いた。
「お袋、教えてれ。天水で何があったんだ？」
「ここ最近近くの山に根城を作った山賊がいるの」
「だからって、高々山賊ごとき天水の自衛団が負けるなんて」
狼の言葉に水仙は頷くが、そのあとに「でも」と繋げた。
「奴等の頭で、閻鬼と名乗る男がいて、山に罠を仕掛けていたの。自衛団の多くがそれに掛かってしまって」
「壊滅状態、と」
水仙は頷いた。自衛団を壊滅させた閻鬼という男がどういうやつかは知らないがやってくれる。狼はそう思った。
自衛団の強さを認識したうえで厄介だから罠にはめた。当然と言えば当然のことだ。
「それで、今さっきまで襲われていたって訳か、だけどどうやって退けたんだ？戦える者なんてそういない筈なのに」
自衛団以外の住民は戦闘力はほぼ皆無、水仙もある程度弓を使えたはずだがそれだけで賊が逃げるとは思えなかった。
「それはあの子のお陰よ」
そう言って水仙が指差す方向をみると青い髪をした槍を持った女性がいた。
歳は狼と同じか1つか2つ程度しか変わらないといったところだ。女性は狼に近づいてきた。
「貴殿が姜維伯約か？」
「ああ、俺が姜維だ。誰だかはわからないが天水を守ってくれたこと感謝する。」
「礼には及ばない当然のことしたまで、名乗るのが遅れたが、私は趙雲、字を子龍という」

常山の登り龍、趙雲子龍、公孫賛から劉備主君を移し五虎将軍の一人である。
「まさか常山の登り龍殿とは」
「ほう、私をご存じか」
「ええ、その武勇私の耳にも届いています。」
狼の話を聞き趙雲は笑みをこぼした。
「私もそれなりに有名になったということか。それはそうと姜維殿、口調は気になさらなくて結構ですぞ?」
狼が丁寧な口調で話していることに気がついた趙雲はそう言った。
「わかった。それで趙雲殿は「趙雲で結構」趙雲は何んで天水に?」
「いやなに、姜維殿が私を知っていたように、私も姜維殿を知っていたということですよ」
「……俺と手合わせしたい?と言うことでいいのか?」
「よくおわかりで」
狼の言葉を聞き口に手を当て趙雲は小さく笑った。
「ですが、とてもそんな状況ではないですな」
趙雲は真剣な表情をしてそう言った。
賊に襲われた後のこの状況で呑気に手合わせなどしている暇などあるはずがなかった。
「ああ、すまない趙雲。お袋、怪我人の手当てをするし連れていってくれ、その時に賊の情報を教えて」
「わかったわ。それと怪我人なのだけれど、偶々旅のお医者さんが来ていてその人が観てくれているわ。」
「わかった。俺も手伝う。羌?悪いが愛理達と合流して連れてきてくれないか?」
「わかった」
「お袋、案内よろしく」
狼は水仙の案内のもと怪我人のもとへと向かった。
怪我人のもとにたどり着いた狼が見たのは多くの怪我人のだった。

怪我の程度は様々だがこの場にいるだけで４０人と言ったところだろう。
狼は拳を握りながらも心を落ち着かせた。
そこで目にはいった若い医者とおもわれる男がいた。そして狼はその男に見覚えがあった。

「華陀！」
「おお！姜維か！」
その男は以前明命が毒を負った際、助けてもらったことのある華陀であった。
「旅の医者って言うのは華陀のことだったのか」
「ああ、姜維に会うつもりで天水に来たんだが、賊が襲ってきてな」
「そうだったのか、と、今はそんな場合じゃない華陀俺も手伝うぞ」
「ああ、わかった！先にそっちの患者を頼む！」
二人は怪我人の治療を始めた。

治療も一段落し今は狼の実家に集まっている。
狼の家は町外れにあり、中を荒らされてはいたものの大した被害を受けていなかった。
「華陀は何で俺に会いに来たんだ？」
「以前姜維が言ったこと覚えているか？」
「ああ、勿論」
「俺はあの後色んな場所で治療をしてきた。そのなかで賊に捕まっていた医者がいたんだ。その医者は捕らわれ脅されて賊の治療をさせられていたらしい。その賊が討伐されて保護された時に俺が怪我を見たんだがその時にその人は泣きながら言ったんだ。「俺は取り返しのつかないことをした。遺族や死んだ人になんと謝ればいいんだ」ってな、その後日死んだ人の遺族が医者に泣きついたよ「息子は貴方に

殺されたも当然よ！息子を返して！」それを聞いて姜維の言葉の意味がわかった。善と悪治すべき相手は確かに選ばなければならない時もあるってな。まあその時の医者の状況は難しいものがあったのは事実だがな。」

華陀はそう話した。

その医者は自身の命が掛かってしまい、嫌々ながら賊を治療したのだろう。その後になり後悔したはずだ。自分が死んでいればこんな被害が出なかったのではないかと。

「そう言えばご老人は元気にされているのか？」

狼の質問に華陀は首を降った。

「昨年天命で亡くなられた」

「……そうか、もう一度お礼を言いたかったんだがな」

「お会いしたかったのです」

明命も悲しそうに顔を伏せた。

「師匠の話はここまでだ。姜維これからどうするんだ？」

場が暗くなり華陀が話を切り替えた。

皆の視線が狼に集まる。

「どうもこうもない、報いは受けてもらうさ、その身を持ってな」

狼はそう言って、賊を討伐するために今持ち得る情報を整理し始めたのだった。

２４話

水仙の話しによれば山賊は２００程度で、今回は自衛団がいないと判っていたため５０程度で襲ってきたとのこと。だがそこに趙雲が現れ自分達では勝てないとわかると直ぐ様逃げていったのだと言う。
「恐らく次はもっと多い人数で来るだろうな」
「そうですね」
「なに、賊がいくら集まったところで我が槍の敵ではありません」
華陀の言葉に愛理が同意見だと頷いた。しかしそんな二人に趙雲は問題ないと言う。
しかし、狼からしてみれば前提から違う話であった。
「まあ、それは攻め滅ぼしにくればの話しだろ？」
「もしかして狼様は攻めてこないと？」
狼は掵里の言葉に頷き自分の考えを話し始める。
「滅ぼしには、な、閻鬼とか言うやつは恐らく趙雲が加わったことにより、天水が反撃の力を得たと考える筈だ」
「そうなると、また山に籠り攻めて来るのを待つと言うこと？」
「いやお袋、それだとあまり意味がない。だから恐らく今度は７０か８０程度で攻めて来て、ある程度したら逃げる。そうなると此方としては賊を追い返したと、このまま一掃出来る！って気持ちになるだろ？だからわざと追いかけさせるように仕向けてくると思うんだ」
「深読みしすぎではないでしょうか？」
狼の話しに明命が考えすぎではないかという。確かに明命の言うこともあり得る話しである。
だが、賊に罠を仕掛け天水の自衛団を潰すだけの頭脳、頭である閻鬼と名乗る男がいるのであれば話しは変わってくるのだ。
「いや、そうでもない」
「そうですね羌？。明命、賊の多くはは弱い村なんかを狙って襲撃するわ、でも今回の賊は態々自衛団のいる天水を襲撃した。それは勝算あってのことだったのよ」

「そうなると、狼様はどうお考えなんですか？」
明命に羌？がそう言い、愛理が訳を説明した。
そこで掄里は狼にどうするつもりなのか、策があるのかたずねた。
「戦える者が殆どいないこの状況で取る行動は限られる。俺が考えているのは２つ、１つは相手の策に乗った上で叩き潰す」
「ですが、山の罠がどれだけ有るかもわからない状態でそれは」
「ああ、勿論わかってる。だから２つめは人数を割る。天水の防衛組と敵地強襲組に別れ挟撃する」
狼の提案に皆沈黙する。
それはそうだ。この状況で人数を割って行動すると言うことは、強襲組は１００以上の賊の中に数人で突貫すると言う意味に他ならないからだ。
「き、きけんしゅぎましゅ!!」
「そうだぞ！姜維！」
掄里と華陀が反論の声をあげた。
「落ち着きなさい掄里、華陀。狼様、２つ目の案の場合、誰を強襲組にされるのですか？」
「俺と、明命、だな」
反論の声をあげた二人を制し冷静に愛理が狼に聞き、狼は皆を見てから答えた。
「その理由をお聞きしてもよろしいですか？」
「そうね、私も聞きたいわ」
愛理は狼の答えを聞き一度口に手を当てたあと狼にその理由を聞いた。そしてそれに水仙も賛同する。
「まず趙雲は槍を使うだろ？この近くの山は木々の生えている間隔が狭い、それ故に槍の扱いに支障をきたすと判断し除外。次に愛理は指揮をとってもらわなくちゃならないから除外。掄里は隠密経験が無いため除外。まあ羌？でもいいんだが明命の方が慣れてるからな。それに俺と明命、羌？以外は木上を移動できないしな」
愛理はまた口に手を当て思考する。

その思考の間に明命がふと思ったことを狼に聞いた。
「狼様、何故木上を移動されるのですか？」
「なに、少し相手の罠に手伝ってもらおうと思っているだけだよ」
「どういうわけですかな？」
明命の質問に狼が答え、その理由を趙雲は理解できず狼にたずねた。そこで狼の言葉を聞き目的を理解した愛理が代わりに説明を始めた。
「狼様の策は、天水に攻めてきた賊には極力、できる限り逃げ出さない程度に防戦し、その間に狼様と明命が敵地を強襲、敵地に混乱を起こし混乱した賊を仲間と合流させるように誘導し山を下山させる。その途中で自身達の仕掛けた罠に飛び込むようにさせその数を削る。そして残った賊と天水を襲撃した賊が合流したところで殲滅する。と言うことで宜しかったですか？」
「ああ、その通り流石愛理だな」
「いえ／／／」
自身の説明で合っているか狼に確めた愛理に、狼は笑顔で愛理に頷いて誉めると愛理は少し顔を少し紅くさせた。
「そう言うわけだ。俺と明命は強襲組として相手に混乱をまねく。残りの皆は天水を死守、加えてなるだけ時間稼ぎを頼む」
「ふむ、私としては強襲組に混ざりたいとこですが、この状況下で我が儘を言うほど馬鹿ではありませぬからな、その役お受けいたしましたぞ」
「が、が、が、が、が、がんばりまひゅ!!」
「わかった」
「御意」
「御意なのです！」
「はぁ、わかった。俺もできるか限りのことをしよう」
狼が皆の役割を指示し皆はそれに納得した。
それを見ていた水仙が笑みを溢したあと上を見ながら呟いた。
「ふふ、貴方、私達の息子はこんなにも逞しく育っていますよ」

翌日早朝、天水の中心部の広場に住民達を集め、狼は行う策について説明した。
「今話した通り俺達は今から山に入る。だけど全て俺のいった通りになるとは限らない。もしもの時は皆にも武器を持ってもらわなければならないかもしれない」
その言葉にあたりがざわめいた。
「俺達は自身の武に自信を持っているのは確かだ。だけどそれは絶対じゃない、疲れもあれば予期せぬ事が起きるかもしれない。それにこれは天水の今後を賭けた戦いだ！自分達の明日を人任せにするのか？皆はこれから賊の言いなりになって生きていくつもりなのか？散々使われて苦しい思いがしたいのか？皆の選択肢は２つ、永遠に服従するか、今抗うかだ！」
その言葉に皆は互いに目を合わせ頷いている。

男は言う。
「ここは俺たちの街だ！」

「賊の好きになんかさせてたまるかってんだ！」
「服従なんて真っ平よ！」
「そうだ！」
「「「「「「「だから！今抗おう!!!!」」」」」」」」
そう住民達が声をあげた。

「明命行くぞ」
「御意！」
「狼！」
天水を出ようとした狼と明命、そこに水仙がやって来て狼呼んだ。

「お袋」
「無事帰ってくるのよ?」
「わかってるさ、天水の麒麟児は、貴方の息子はこんなところで死なないよ」
そう言って狼は水仙と抱擁をかわす。
「明命ちゃんも気を付けてね」
「はい!義母様もお気をつけて」
明命も元気に返事を返した。何か違う気がしてならない狼ではあったが急がなくてはならないため放置した。

そして今、天水の反撃が始まる。

２５話

狼と明命は森に入るなり木に登りその上を飛び移るように駆けていた。
そしてしばらくして狼があるものに気が付く。
「明命止まってくれ」
狼が見つけたのは恐らくこれから天水に向かうであろう賊達だった。数は１００と言ったところだ。
狼の予想より多くの賊が天水に向かおうとしていたのだ。狼は空に慌てず懐から赤い布切れを鳥だして賊達が離れるのを待った。賊達との距離がとれたのを確認すると指笛を吹く。すると何処からともなく颯がやって来た。
「颯、此れを愛理に届けてくれ」
「ピュイ！」
そう言って赤い布切れを颯にくわえさせ放つ、それを見ていた明命が心配そうに狼に話しかけた
「大丈夫でしょうか？」
「大丈夫だ。皆を信じよう。それに俺達が急げば皆と速く合流できる」
「はい！」
移動を再開しようとしたとき、狼は下にあるものを見つけた。
それは賊自身が罠に掛からないよう下山する側からしかみえない目印だった。
「なるほどな、これなら楽に嵌められる」
そして狼は木から降り天水に向かった賊達が通った道を外れるように目印の場所を変えた。
「これでよし、さて先を急ぐぞ明命」
「御意！」
そして二人は先を急いだ。

一方天水組は賊に備え準備をしていた。
農具や包丁を先端にくくりつけた棒など急ごしらえな武器ではあるが無いよりはましだろう。
それに戦いの素人ばかりで剣などで斬りかかるより間合いの広い武器で応戦する構えだ。
「いいですか前方では私達が戦います。それを抜ける賊達がいた場合、一人に対して五人で挑んでください。卑怯等と言うことはありません。この戦いは皆さんが協力し互いに助けながら生き残る戦いです！」
「「「「「応!!」」」」」
「子供さん達は絶対に家の中から出てはだめでしゅ！」
「「「「は～い!!!!」」」」
住民達に指示をだす愛理と掄里、そんな中、颯が愛理の肩に止まった。そして愛理は颯がくわえるものをみて皆に伝える。
「狼様からの報によると賊は１００程の数で移動を始めているようです！」
その言葉に辺りがざわめく。しかし聞いた話よりも賊が多ければそれも当然のことだ。
「心配することはない、この趙子龍の槍で賊など一掃して見せよう！」
「抗え、覚悟を決めろ」
ざわめく辺りの者を趙雲と羌?が鼓舞する。
「そうだ、抗うんだ！」
「賊なんかに屈しない！」
「自衛団の仇をとるんだ！」
「今度は私達が彼らを守るのよ！」

いろんな声が飛び交う。
「俺一人じゃ出来る筈もない、だけど皆で協力すればなんとかなる！自分達の街を、今まで守ってきてくれた自衛団を、この街の未来である子供達を、自分達で守るんだ!!」
「「「「「「うぉぉぉぉぉぉ!!!!」」」」」」
誰かがそう叫び他の住民達も武器を持ち天に向かい突き上げた。士気は上々これならきっと大丈夫と愛理は思った。
「狼様、御武運を」
その愛理の言葉は風に流れていった。

「あれか」
暫くして賊の拠点を発見した狼と明命、息を殺し様子を伺う。
「全くなんだってんだよ天水に現れたあの青髪はよぉ」
「それでも問題ねぇって、今度は頭も行って前より数も多いんだぜ？今頃天水の奴ら震えあがってんじゃやねぇのか？」
「違いねぇ！」
「「「「ぎゃはははは!!」」」」
その言葉を聞き狼は闇鬼と名乗る奴らの頭が天水に向かったことを知る。
「そいつの実力がどの程度かは知らないが俺らの情報は入ってないみたいだな」
「はい」
小さな声で明命と会話をする。頭のいない賊など統率のとれない阿呆の集まり、ならすぐに始めるかと狼は明命を見ると明命もそのつもりだったのか小さく頷いた。
「他の村とかなんかは大人しく従ってるのにな？」
「その話し詳しく聞かせてもらおうか？」

「「「!?」」」
「だ、誰だてめぇ!!?」
「お前らが言う震えあがってる奴ら、だ！」
　そう言うと同時に賊の頸をはねる。
「て、てめ」
「遅いです！」
　仲間が頸をはねられ、驚きながらも狼に斬りかかろうとするものを明命が斬る。
「さぁ覚悟はいいか？祈りはすんだか？ならもういいだろ、死ね」
「覚悟です！」
　そう言って二人は賊を斬り始める。
「な、なんだよ！こいつら！」
「ぎゃあぁ！」
「速すぎ、ぐぎゃ！」
「こ、殺される！」
「に、逃げろ！」
「てめぇ！押すんじゃねぇ！」
「うるせぇ！てめぇこそ！」
　賊は直ぐ様混乱した。中心になる人物の不在により統率などあったものではない。ましてや自分より強い者に立ち向かう有期など無い者ばかりだ。
「どうした？逃げることしか脳がないなら？お頭さんに助けてもらったらどうだ？」
「そ、そうだ！お頭だ！」
「助けてくれ！お頭！」
　狼の言葉を聞き次々と天水の方向へ向かう賊達を見て狼はため息をついた。
「呆れる程の馬鹿だらけだな」
「ですが、これで予定通りなのです」
　呆れる狼に明命がそう言った。狼は気を取り直して明命と賊を追い始めた。

「はぁはぁ、はぁ」
賊達の中で一番速くに逃げだした男が罠のある地帯へ辿り着いた。
息を切らしながら目印を探す。
「あ、あった！」
急いで目印のある道を進もうとしたがあることに気がついた。
もしこの目印にあの二人が気が付いたら、罠の場所がばれてしまうのではないかと。
男は慌てて目印を外しそれを自身の懐にしまうと道を駆け出した。
その道が普段の道では無いとは知らずに。

「思いの外攻めてきますね」
「ああ」
狼と明命が賊を追い回しているとき、愛理と羌？は賊と戦いながらそんな話をしていた。
これであまり不信がられないように引くつもりならば中々役者だと愛理は思った。ふと一人だけ動きを見せない馬に乗った賊が目にはいった。
「あれが閻鬼、でしょうね」
「そのようですな」
ふと愛理が漏らした声に趙雲が答えた。
「趙雲殿単身突撃は駄目ですよ？」
「なに、そんなことは考えておりませぬよ。なにより、はぁぁぁ！」
そんな話をしながらも趙雲は賊を穿ち言葉を繋げる。
「たまった鬱憤は後で姜維殿に解消していただくゆえ」
ふふふ、と笑ながら趙雲は言った。

「くそぉ！青髪の他にこんな奴らがいたなんて知らねえぞ!?」
「コイツらさえいなけりゃ天水の奴らなんて震えてるだけの癖に！」
「お頭！どうしやすか！」
　賊が悪態をつき、闇鬼へ話しかけた。
「青髪以外にもいたとはな」
　そう答えながら闇鬼は別のことを考えていた。
『天水をこのまま落とせればそれでよかったんだが、コイツらあの三人の強さに驚いてまともに攻めれて無いな。数では此方のが上なんだから一気に攻めりゃいいものを、と言ってもあの三人の強じゃ今のコイツらじゃ無理な話しか。本当に予定外だ仕方ねぇ一旦引いて罠に誘い込むか』
「退くぞ！お前ら！」
　そう言って闇鬼は撤退を指示する。
　それを聞いた賊達は一斉に退き始めた。その退く速さは素早く相当叩き込んだのだと思わせるものだった。
「退き様が賊にしては速いですね」
「今まで何度も同じことをやって来たのでしょうな」
　その退き様を見て素直な感想を述べる愛理の言葉に趙雲がそんなことを言った。
「あり得る話ですね」
「追わないのか？」
　そんな二人の所に羌？が合流し愛理に問いかけた。
「いえ勿論追撃します。皆さん！賊は我々に敵わぬと悟り逃げ出しました！今こそ反撃の時！このまま賊を滅ぼしましょう!!」
「「「「「「「「うぉぉぉぉぉぉぉ!!!!!!!!」」」」」」」」
　愛理は住民たちを鼓舞するように声をあげた彼らもそれにこたえた。

賊の一人が罠の目印を外した為に罠の位置が判らず立ち往生する賊達を狼と明命が威圧し、あるものは自棄になり二人に向かっていきあるものは罠にかかり命を散らし、命を落とさずとも足に竹槍が刺さり動けなくなったりとなっていた。

罠は落とし穴の中に竹槍を仕掛けてあったり、紐にかかると竹槍が左右から襲ってきたりなど様々だった。

「よくもまあこんだけ仕掛けたもんだ」

「そうですね、驚きました」

二人も罠の多さに驚いた。向かって来たものは斬り伏せ怪我を負ったものは戦闘不能と判断し放置した。負傷した賊に情けをかけたわけではなく、それよりも今は運よく罠を抜けた賊と天水を襲っている賊を討伐することが優先されるからであった。

「明命仕上げにかかろうか」

「はい！」

二人は木に登り動き出した。

最後の仕上げに取りかかるために。

２６話

　闇鬼は目の前で起きている状況に困惑していた部下から天水に青髪の女が現れ逃げ帰ってきたと聞き、今度は前回よりも多くの部下を連れ自分が率いて天水に赴いたのだが、天水に着いてみれば更に報告に無い女が二人いた。
　その女達も部下達、そして自分自身でも勝てない武を持っていた。仕方ないと思いながらまた罠にはめてやるつもりでいたにも拘らず、山の麓まで来た闇鬼が見たものは慌てて森を抜け出てきた数人の部下だったからだ。
「おまえらどうした！なに慌ててんだ！」
　闇鬼は森を抜け出てきた部下達に声をあげた問いかけた。
「た、助けてくれお頭！」
「天水の奴等が！妙な二人組が！」
「!?」
　闇鬼は部下達の言動から何があったのかを悟った。
『まさか報告に無かった奴が他にもいたのか!?しかも二人で１００近くいたこいつらを強襲したのか!?』
　闇鬼は戸惑う、森から出てきた部下は数名、もしかしたら他は殺されたのではないかと。そうなるとそんな奴等と天水の奴等を今の戦力で戦わなければいけない。敵の強さに怯え、増援もない、それを連れてきた武かが知れば士気が低下するのは明らかであり、同様も免れないだろう。
「お、お前ら！他の奴等はどうした!?」
「大半はお前達が仕掛けた罠に掛かって死んだか行動不能、残りは俺らで斬った」
　慌てて残りの部下の事を聞いた闇鬼の質問に答えたのは、森を抜け出てきた狼だった。
「で、で、出たぁぁ～！」
「お、お頭！こいつ等です！」
「!!その声、まさかてめぇ姜維伯約か!!?」

狼が現れ森を抜け出てきた賊達はあわてふためいた。しかし闇鬼はその声を聞き狼の正体に気がついた。
狼は何故闇鬼が声を聞き自分が姜維であると気がついたのか不思議に思ったが直ぐ様闇鬼に言い放った。
「??そうだ。お前が闇鬼だな？悪いなどとは思わない、お前が犯した罪を清算して貰うだけだからな」
狼がそう言ったとき闇鬼の連れてきた部下が闇鬼に追い付き、その後方に愛理たちの姿もあった。
「賊ども！貴様の根城にいた仲間はもういない！ここが貴様等の墓場だ！」
狼は追い付いてきた賊に向かいそう言った。
「何言ってんだあいつ？」
「おい、見ろよ頭の横にいんのって確か残ってたやつじゃないか？」
「じゃあ、あいつの言ってる事は本当なのか?!」
「お頭！どうすりゃいいですか!?」
「お頭！」
賊達は混乱し、闇鬼に詰め寄る。
自分達ではどうすればいいのかわからない、だが闇鬼なら、頭なら何か良い考えがあるかもしれないと。
だが、そんな部下の気持ちとは裏腹に闇鬼はいい放った。
「はは、ははははは！お前ら！彼奴を、あの男を殺せ！全員でかかれ！何がなんでも殺せぇぇぇ!!」
「か、頭？」
「頭どうしたで？」
「なんだ、頭はどうしちまったんだ？」
「わかんねぇよ」
「彼奴を殺せって言ってるのが聞こえなかったのかぁ？彼奴を殺せぇぇぇ!!」
「「「「へ、へぃ!!!!」」」」
自分達の頭である闇鬼の豹変ぶりに驚きながらも部下達は狼へと

向かっていく。
狼は考えていた。闇鬼は自分を知っていて尚且つ恨みを持っている。だか、恨みをかった覚えもないし今まで賊達に名を名乗ったこともなかった。
だとすると闇鬼は何故自分をこんなにも殺したがっているのかが判らなかった。
「明命、敵の狙いは俺だ。今のうちに愛理と合流してその事を伝えてくれ、俺は奴等の足を狙って動きをとめる、そうなれば皆が戦う可能性が減る。愛理達が到着し次第賊を方位殲滅、武器を捨て命乞いした者はなるべく生かしておいてくれ」
「狼様、それは」
「心配するな大丈夫だ。俺を信じてくれ」
狼は明命に指示を出す。だがやはり明命はその指示に不安を抱いた。いくら狼が強くとも心配なものにはかわり無いからだ。
そんな明命に狼は頭を撫でながら自分を信じろと言った。そこまで言われ明命が小さく頷き駆け出した。
「さて、と、何故こんなにも恨まれてるかは知らないが、今は些細なことだ。死にたくなかったら武器を捨てろ、それが嫌なら俺を殺してみろ!」
狼は向かってくる賊に突っ込む、打ち合うつもりは毛頭なく一人を斬りつけてはすぐ他の者を狙う。
一対多において足をとめることは悪手である。常に動き回り相手に武器を振らせ同士討ちを狙う。そうすることにより相手が武器を振るう際に躊躇が生まれるのだ。密集地帯、狭い空間で武器を振るう際に必要とされるのは辺りの状況を把握する空間把握力である。
それがない者が無闇に武器を振り回せば結果は判りきったものだ。

「は、はえぇ！」
「痛てぇ！」
「おい！お前ら！気をつけろよ！」
「ぎゃっ！」
「っ、おい！俺は味方だぞ!!」
「こ、こんなやつに勝てるわけねぇよ！」
　同士討ちを恐れ手を止める者、錯乱し剣を振り回す者、勝てぬとわかり逃げ出す者が現れ始めた。
『逃げようとする奴等は足を斬りつけて動けなくさせるとして、他の奴らもある程度痛め付けた。それに愛理達ももう着く、闇鬼をとるか』
　狼は賊達の状況を見てそう考えて行動を起こした。賊達の合間をすり抜け、闇鬼に接近する。
「くそ！くそくそくそくそくそ！役にたたない奴等め！」
「…闇鬼何故そんなにも俺を憎んでいる？」
　狼が部下達の合間をすり抜け接近してくると闇鬼は声をあらげた。
　そんな闇鬼を見て狼は闇鬼に自身を恨む訳を聞く。
「お前が！お前さえいなければ俺は詠さんと結ばれていたんだ！」
「!?」
「幼いながらに３０を越える賊を１人で殺し、天水の麒麟児と呼ばれるようになったお前が私塾に来てから全てが変わってしまったんだよ！嘗ては俺と競いあっていた詠さんは、自身より優れるお前と競うようになった！私塾抜け出るお前を探しに行くようになった！」
　狼は闇鬼の言葉を聞き驚いた。
　況してやここで詠の名前が出てくるとは思っても見なかったからである。
「お前が天水から消えた時、俺は喜んだ！これでまた以前の用に戻れるとな！…だが現実は違った。詠さんは消えたお前に負けない為にそれまで以上に励んだ、お前だけを見ていた！側にいる俺じゃなく、何処にいるかも判らないお前を見ていた！嫉妬したさ！何故俺じゃ

ないのかと！何故ここにいないお前なんだとな！」
「……」
　閻鬼は吠えるように喋り続け、狼は記憶をたどり思い出していた。
自分達の世代の私塾で三番目に位置していた人物、山向こうにある街から来た、それを狼は思い出した。
「李協」
「思い出したか？ああそうだ！俺は李協だった、だがもうその名は捨てた！お前へ復讐すると決め賊になった時にな！お前にわかるか姜維?!俺の気持ちが！天水の麒麟児と持て囃され、私塾を抜け出てばかりのお前が！何故詠さんに真名をあずけられた?!何故お前が！お前ばかりがあぁぁぁぁ!!」
「!!」
　閻鬼は叫びながら狼へと馬を走らせ斬りかかる。
　狼はその閻鬼の言葉を聞き理解した。

　李協は詠から真名を預かっていない、と。

27話

馬で駆けながら闇鬼は馬上より矛を振りかぶる。
闇鬼が矛を振り上げたと同時に狼は馬に向けて殺気を放った。その殺気をうけた馬は本能からその危険を感じとり、前足を上げ止まりその反動で闇鬼は馬上から投げ出され地面に背中から叩き付けられるように落ちた。
「がはっ！」
背中を叩き付けられた闇鬼は肺の空気を吐き出した。馬はと言えば闇鬼を振り落とした後、逃げるように走って何処かへ行ってしまった。
「……おい」
地面に叩き付けられた闇鬼に狼が近づき話しかけた。
「ぐっ、てめぇ何を「黙れ」…」
話しかけられた闇鬼はよろよろとしながら立ち上がり何が起きたか判らず狼に問おうとしたがそれは狼の決して大きくはないが静かな怒りのこもった一言で止められてしまった。
「お前が李協と名乗ろうが闇鬼と名乗ろうがどうでもいい。一つ聞かせろ、お前は詠から真名を預かってないな？」
「……」
狼の質問に闇鬼は答えなかった。
「無言は肯定とうけとる。例え本人の前でなくとも許可なく真名を呼ぶことの意味は当然理解してるよな？」
真名を許可なく呼ぶこと、それ即ち殺されても文句の言えぬ事である。例えそれが本人の前でなくとも例外ではない。狼は怒っていた、幼馴染みである詠の真名をこんな奴が許可なく呼んでいたことを、こいつは詠の名を真名を汚したのだと。
「は、はははは！五月蝿い！確かに俺はまだ真名を預けられてない！わかるか？まだだ！俺はお前を殺す！そうすればきっと真名を預けてくれる！そして結ばれるんだ！お前さえ死ねばきっと、きっとまた、え「もう喋るな」ごふっ！」

閻鬼がまた詠の真名を口にしようとした時狼の蹴りが閻鬼の喉元を直撃した。そしてその一撃により閻鬼の喉はつぶれた声を出すことはできなくなった。
「お前が俺を恨もうが妬もうがお前の勝手だ。だがお前は直接俺に復讐せず天水に手をだし、関係のない人を巻き込んだ、関係のない人を傷つけた。さらには許されてもいない真名を意味もわからない理由で呼んだ」
狼はそう言いながら殺気を放つ、その殺気を浴びて閻鬼はガタガタと震え呼吸もうまくできなくなっていた。
「お前が犯した罪は死んだところでは償えない」
そう言って狼は殺気を止めた。殺気から解放された閻鬼は大きく息を吸い込んだ。
「が、死ぬ以外に償いようも無い」
チン
そんな閻鬼に狼がそう言い放つと同時に、チンと音がなった。
「自分の罪を償ってから生まれ変わってこい、もう聞こえてないだろうがな」
狼がそう言いながら閻鬼に背を向け歩き出すと同時に閻鬼の上半身と下半身が別れを告げた。

閻鬼が討たれ完全に統率が無くなった賊達は逃げる者、投降する者などだった。投降した者も初めは殺すという流れだったが狼の母、水仙によってとめられた。今の天水には人手が足りないことから償いとして無償で復興作業をすることで許すという形になった。
天水の復興作業を始め1週間がたった。
今のところ賊達は素直に働いている。が、数名は嫌気がさしてきているのがわかった狼はとある行動にでた。
「今日は山で猪狩りだ5人1組で最低2頭狩ってくれ」

そういって賊達を3組にわけ山に向かわせた。
山に入って行くのを見届けた狼は一緒に来ていた明命と羌?に話しかける。
「明命、羌?、手はず通りに頼むな」
「御意!」
「わかった」
そうして、3人もまた山へと入った。

山に入って一刻まだ猪は一頭もとれていない組の賊は既に嫌気がさしていた者がいた。

「毎日毎日こきつかいやがって」
「本当だぜ、朝から晩まで働きっぱなしこれじゃあからだが持たないぜ」
「全くだぜ」
5人のうちの3人がそんなことを言い始めた。
「なあ、今のうちなら逃げられるんじゃねぇか?」
「おお、このまま山を突っ切っちまえばいいだ」
「そうと決まれば!おい!お前らも来いよ」
3人は後ろからついてきている少し幼い二人にも声をかけた。
「…俺は、行かない」
「…俺もだ」
しかしそれを二人は断った。
「はぁ?お前らこのままでいいのかよ」
「行きたければ行けばいい俺はなんと言われようと行かない」
「いいも悪いも俺たちがいけなかったんだ、罪は償う」
「はっ!馬鹿馬鹿しい行こうぜお前ら!」
「一生こきつかわれてろ!」
「じゃあな!」
そういって3人は2人をおいて逃げていった。

「馬鹿なやつらだな」
「え？」
去っていく3人をみて1人がそういった。
「今俺たちが、生きてるのは天水の人達の慈悲あってのこだってのに」
「…そうだな、だから俺らはその恩を一生かけてもかえさなきゃいけないのにな」
２人は投降したあと殺されるものだとばかり思っていた。だがそうはならず生かされ復興の手伝いをさせられることになった。２日目辺りまでは不満はあった、だが、天水の人達をみていてそんな気持ちはすぐになくなった。失敗すれば怒られ上手くできれば褒められた。自分達が壊してしまったにもかかわらず、だ。
「人数は減ったけどなんとか２頭捕まえるぞ」
「だな」
そういって２人は再び猪を探し始めた。

そんなやり取りを木上から狼は視ていた。
「あの２人はやっぱり逃げなかったか」
狼が天水で視たかぎり彼等は逃げないであろうと判断していた。そして逃げた3人も予想道理であった。
「さてさて、愚か者の始末でもしますかね」
そう言い残し狼は木上から姿を消した。

「何とか２頭狩れた」
「うちは3頭だ！」
明命と羌？に任せた組が帰ってきて互いの成果を話している。両組とも1人少なく４人になっていた。
「「はぁ、はぁ」」
そんなとき山から狼が視ていた２人が山から出てきた。猪は一頭、

がその大きさが他の組の倍以上の大きさだった。
「はぁ、すみません、あと一頭、はぁ、今から狩ってきますんで」
「もう少しだけ、はぁ、はぁ、待っててくだ、はぁ、さい」
２人で苦労して狩ったうえここまで運ぶのに大分疲れたのがうかがえた。
「その大きさなら２頭扱いでいいさ。お疲れさま」
その言葉を聞いて２人は地面に腰をおろした。

２８話

天水へ戻ると狩った猪は捌かれ干し肉にし保存されたり、鍋にして街の広場で振る舞われた。
広場に集まり猪鍋を食べながらワイワイと騒ぐ片隅に狼はいた。
狩りの時に逃げ出した者達は狼、明命、羌?がそれぞれ始末した。
「狼様」
「愛理かどうした?」
「いえ、1人このような片隅でどうされたのかと」
「これからどうするか考えてたんだ。天水の復興をしなきゃいけないが活動を再開したい気持ちもある。羌?にだって目的がある。いつまでも手伝ってもらうわけにはいかない。」
「そうですね。義遊軍を立ちあげるにしても支援者を探さなければなりませんし、兵も集めなければなりません。」
天水を拠点に行動するつもりだった狼。だが今の天水の状態ではそれは難しかった。そんなことを考えていた狼だったが皆に呼ばれたのでそちらへと歩き出す。
「まあ、暫くは天水の復興を優先しながら考えていくしかないか」
「はい」
結局具体的な方針は決まらぬまま狼と愛理も騒ぎのなかに入っていった。

「では、狼殿達もお元気で」
「ああ、星も元気でな。羌?、すまないもっと力になってやりたかったんだが」
「いや、大丈夫だ。」

お祭り騒ぎから3日がたった日の朝。羌?と星が旅に出ることになった。因みにあの戦いのあとに狼達は星、それと烈と真名を交換した。

「それではまた何処かで」
「ああ、またな」
「ん、またな」
そういって2人は旅立っていった。

「さて、狼。貴方は今一度旅に出なさい。」
「……何を言い出すんだよお袋。」
羌?と星を送り出し1週間がたった頃、水仙は狼に突然そう話をきりだした。
「貴方は自分が旅に出るときに言った答えをみつけたの?」
「…」
自身で独立した勢力を立ち上げるのか、それとも今ある勢力に支えるか、それはまだ狼の中で完全に決まってはいなかった。支える候補がいないわけではないが、支えたいというほどでもなかった。
「まだのようね。確かに縁に恵まれ友を多く作ったようだけれども、肝心なところが決まっていないのであれば旅を続けなさい。天水の復興もそれなりに進んでいるし大丈夫よ、貴方は貴方の成すことをなさい」
「…」
水仙にそう言われ悩む狼。
そんなとき明命が慌ててやってきた。
「狼様大変です!」
「明命どうした?」
「ええっと!ともかく広場へ!」

明命に言われ狼は広場へと向かった。そこには沢山の資材が積まれていた。
「いったい誰が」
「おお！姜維君！」
狼が不思議がっていると聞き覚えのある声が狼の名を呼んだ。
「田間（でんま）さん！もしかしてこれはあなたが？」
田間は狼が旅をしている最中に助けたことのあった商人の１人だった。そんな狼の問いかけに田間は笑って答えた。
「ああ、商人仲間に天水が大変だと聞いてね。少しでも力になれればと思ってきたんだよ。」
「しかし、これだけの資材を」
「姜維君、君は私達家族の命の恩人だ。君は気にしないでほしいと言ってくれたが、私としては少しでも恩返ししたいのだよ。」
田間はそういって笑った。
「田間さん、ありがとうございます。」
「ははは、気にせんでくれ。それにそう思ってるのは私だけじゃないんだ」
「え？」
「よう！姜維！」
「姜維さん！」
田間にそう言われた狼の周りにぞろぞろと資材や食料を持って集まる人達、それは田間と同じく以前に狼が助けたことのある人たちだった。
「皆さん、本当にありがとうございます」
「やめてくれやめてくれ！俺らは姜維が助けてくれなきゃこの世にいなかったんだ！」
「そうですよ！こんなことじゃとても返せない恩があるんです！」
「困ったときはお互い様だと言ったのは姜維君じゃないか」
狼の言葉にたいして皆笑ってそう言ってくれた。

狼はその日の夜旅に出ることを皆に話した。
最初は自分も着いていくと皆言ったのだが、狼が説得し狼が1人で旅、愛理達は天水を拠点にし行動するという話でおさまった。
「田間さん達が支援してくれると言ったときは驚いたけど助かったな」
「はい。私達はこれから天水を拠点として、義遊軍を募れます。」
「ああ。俺が戻るまでの間のことは愛理に任せる。出来る限りで構わないから多方面の情報も集めてくれ。」
「御意！」
「明命、経験はなくて大変だと思うが、残党達の調練は頼んだ。逃走する者は容赦しなくていい。」
「御意です！精一杯頑張ります！」
「掄里は2人の補助を頼む。」
「ぎ、御意でひゅ！」
「…烈はどうするんだ？」
3人に指示を与え狼ほ烈にこれからどうするかをたずねた。
「…狼の義遊軍の医師として参加させてもらえないか？」
「俺としては嬉しいがいいのか？」
狼の問いに義遊軍への参加を希望した烈。狼からすると烈の参加は望ましいが旅をしながら各地で治療を行っていくものだと予想していた。
「ああ、俺は狼に着いていく。そう決めたんだ。」
「…わかった。よろしく頼む」
「ああ！こちらこそよろしく頼む」
こうして烈の参入が決まった。

翌日の朝、天水の門の前まで皆が見送りに来てくれていた。

「狼様くれぐれも無茶はしないでくださいね」
「そうなのです！」
「です！」
愛理、明命、掄里は昨日からそればかり狼に言い続けていた。
「わかったって言ってるだろ？じゃあ行ってくる。天水のことは任せた」
「「御意！」」
「任せろ！」
「気をつけるのよ狼」
「お袋もまた会うときまで元気でな」
挨拶を済ませ狼は歩き始めた。自身の考えの答えを探すために。